

「ほ、ほ、まあ、失禮な事を仰しやい、或る御研究を爲さつて在つしやる。工學士の大葉幸彦様と云ふ方ですわよ。貴方は、例も無遠慮ですから、妾困つてよ。少し御注意なさいませな。」

洋傘を、持つ手を替へて、立ちあがつた辰子は、月見草の花からぬけ出た、精を眺めるやうに、義雄は顧りみる。

「爾うですか、夫りや大きに失敬しましたな。否、辰子さん、此方に、何か御用がお在なんでしょうか、若し、漁村の漁夫等から没常識批評を受けますと、家の人格に障りますぞ。さあ彼方へ参りませう。僕何ですよ。貴女のお好きな草花を持つて来ました。」

「あや、爾うで御座いましたか。有りが度う御座います。東京の方は、皆様お變り有りませんでしたか……」

「え、東京は、別に變りませんが、僕の雑誌社では、大いに變動がありましたよ、それに連れて、僕も……」

「怎麼かなさいましたか……」

「え、もう僕は、筆を捨て、雑誌記者から脱さうと思つて居ます。それに就いて、子爵に逢ひ度いと存じましてな、此處まで参りましたんですが、今朝お歸りになつたんださうですな。」

「え、御用がお在りして……」

幸彦へ、氣を兼ねるやうに、絶えず顧りみる辰子は、義雄と語るのが、罪でも犯して居るやうに、或る不安を感じて、眉を寄せて居る。

「爾うだつた。時に、御令兄は何方へか……」

「はい、大阪の方へ、銀行の御用で御出張になりました。母も遂ひ二三日前まで居りましたか、何日までも東京の邸を空て居られませんし、別荘は女中と妾と爺や夫婦の四人だけですの……」

「そりやお寂しいてせう。やあ、未だ先刻の男……否、彼方へ怎麼です。御別荘の

方へ……」

「え、参りませう。貴方まあ先へ……」

「否、御一緒に参りませう。兎に角子爵の御關係なまつて居る炭鑛會社でも僕の筆一つで今日の隆盛に成つたんですからな、僕として此度の事に就いては、大いに其の何ですからな、貴女としても……忘れやせてせう。雑誌記者の肩書だが、明中大學卒業生としては、慢じる譯ぢや有りませんが、僕が社會では……まあ近代に於てはすな、」

「ほ、ほ、もう解りました。では参りませう。大葉様飛んだ失禮を致しました。御免下さいまし。」

「爾うですか、お歸りですか、僕こそ失禮しました。」

「やあ失敬、まあ御緩くり遊びたまへ。」

洋傘を脊にした、辰子の後から、微笑みを浮べた義雄は、誇るらしい顔色をして

松山を下りて去く、

「莫迦な人達だ、權威を誇らうとする。其影の寂しい悲哀を、種々な物を忘れやうとする陋劣さ、はッはッ、爵位と、生活、色と慾……厭に成つちまう。」

と云ふ幸彦も、名を愛の爲めに作らうとするのは、成功までの気分では無からうか、功成つた後には、果して、同じ心で居る。美しい……で、居られやうか、現在の寂しさは、表面的のものが、知らず識らずの中に、心へまで寂寞を感じるのは、妻……、それが、耐きれない悲哀を深からしめるので、その慰藉を……、辰子に求めるとも無く、求めるやうに成つた。

「繁子に……、濟ない……、併し、男だつて、妻に對する貞操は在る。が、求めやうとするのは、既に、其貞操を汚して居るのではなからうか……」

思はず體を慄はして、四邊を眺め廻せば、濱邊を去く、辰子と雑誌記者の高井との姿が、及びもつかぬ嘆息となつて、吻つと吐いた。

「やあ、大葉様ぢやあごわせんか……、久し振りてがしたな、ほら、體も壯健になりやしたな。」

斯う聲をかけて、額の汗を拭きく近寄つた。繁子の父の萬兵衛は、瘦病た幸彦を仰いで、卑見らしい冷笑をする。

「お、繁子のお父様でしたか、有りが度う。さあ宿へ……、暑かつたてせう。此方へ……」

「おつと、否、宿へは行きますまい、直ぐ戻りやすからね、此處で結構てがすよ。へッへッ、」

「はあ、何か御用で……」

「へい、其の用で参りやしたがね、怎麼てがあせう。一通お繁に宛て、書面を戴き度いのですが、」

「え、書面……」

「へえ、之れあお繁からへな、貴方へ上げてくれつてえ金で、大枚百圓てがすがね此金と共にてがすな、」

「……」

「其の……、縁を切つたと云ふ、縁切りを願えていので、彼女も可愛さうに、貴方の爲めに苦勞してやすぜ、だが、憎いぢやごわせんか、彼女も當世にかぶれたか、金の無い、見込の無いものにつかふなつてな、是非つてな事で、へい、其縁切りに俺が出やしたので、お氣の毒てがすよ。大いに同情……とか致しやすよ。そりやあね、彼女の身に成りや尤もな處もありやすぜ。へッへッ、少しはね、樂にさせて遣つて下せい、それが後生の爲めてげすよ、」

「うむ、む……、爾うか、諾しッ、切つて遣らう。併し、お父様、一應繁子に會させて下さい、未練なやうだが、其上て切つて遣る。」

「さあ、其處てがす。會へる位なら、何も俺が來るものか、ね、之りや其の手切

れ金で……」

「黙言れッ、手切金とか、那麽もの貰つて、えッッ、汚らはしい、あ、那麽女と知らず。矢張危険から脱れられなかつたか、僕が悪いのだ、怨むまい、若し、もう何も云ふまい、聞きもしまい、お言葉通り縁を切つて遣るから、歸つたら、繁子に斯う云うて下さい、必然成功するつてね、體を大事に、女の道を忘れても、心の教へは忘れるなつて、宜しく云うて下さい、頼みます。」

「へッへッ、畏まりました。では此お金を……」

「金……、えッッ、汚れた金は、斯うして遣るッ、」

「あれつ、何しやが……りなさるんで、勿體ねえ、」

地へ投げつけた紙幣を、慌て拾つた萬兵衛は、再度渡さうとするのを睨みつけ、  
「手に執らば、汚れた金を受け取つたも同様だ、僕は、もう見るのも厭だ。貴方戻つたらね、今迄いろく有りがたかつたつてね、何、證書……、莫迦云へ、其方か

らの申込みに、僕の方で書くものがあるか、併し、心配するなつてな、後を追つたり、未練らしい真似はせんと、能く云うてくれ、では失敬する。」

「けれど、あゝ若し、之れぢや何の役にも使ひにも成らねえ……うむ、よし、彼男が、もうお繁を追無えとすりやあ、此方のものだ、次いでに此金も……へッへッ、待てば海路と来るね。」

悲哀の苦痛が、破ぶれ裂けんばかりの胸を押へて、悄然と、此處を立ち去つた幸彦は、云ひ知れぬ涙を浮べて、唇を噛み、己が宿の研究室へ入るや、深い嘆息を吐いて、男泣きに、身の憐なさを泣いた。幸彦の後姿見送つた萬兵衛は、莞つと冷笑を投げて、潮風を涼しさうに受けながら、幕張の停車場さして去く。

## 同

## 三 子の可愛さ

體を投げ出して、力無く坐り直した幸彦は、研究の機物を見廻して、吻つと嘆息吐き、悄然と、暗涙に咽鳴むだ。

「噫、」

爾麼女と知らなかつた。もとより、何れは斯う成るであらうと覺悟は爲て居た。彼藝妓程、危険な、誘惑の多い、虚榮、金……等の慾望に依つて、知らず識らずの中に、體を顧みなく成る。貞操を強ひるのは、男が、女に對する或る弱點から、意氣地の無いのを發表するやうなものだ。

それも、自分の不甲斐無いが起因で、妻を苛責ると云ふのは、己れを偽はるもので、之れ程苦悲を深めるものは在るまい。

「あ、何と云ふ意氣地無しだらう。莫迦な身の上だ。」

法律では、夫婦間の義務を説いて在るとは云へ、妻の腕に依つて、養はれて居た自分は、何と云ふ男なのであらう。昔古は知らず、腕に據る現社會の激甚な生存裡

それに處する道を忘れたのでは無い、病魔の襲す處となつたのも、意志の不堅實から、あ、何れから、己れに解決を與へられやう。ほぐれた糸を丸めたやうに解かうとする場所が無い。反つて懊惱を増すのみで、慘な態に泣くより他無い。

「厭だ、あ、厭な人の世だ……」

人生の苦悲は、招かずとも、寄り添ふものだが其裏面、影には、喜嬉がつき纏つてゐる。己れは、何故斯うも女々しかる、莫迦な、意氣地なしが、爲す可き義務を忘れて、肉體から生ずる、汚ない精神の苦痛を悶え、其の寂寞の悲哀に泣く程、未だ弱い男ではない筈だ。

「うむ、爾だ。職務の研究機が、愛の生命だ。繁子が求めた機械……と思ふと、見ても厭だ。己は、己の力に據つて、改めて機梳の研究をしよう。そして、成功を夢みずとも、國家社會の爲め、其利用法を講じて、認めらるゝ迄は、此生命を捨てまい、爲す可き職が、愛だ、其愛の爲めに、美しい働きをしよう。」

始めて、己れの心に、僅ながら、解決を與へられたかのやうに、寂しい微笑みをして、机に寄り添ひ、筆に墨を含ませ、延た巻紙の端から、筆を走らせようとして、思はず詰むだ唇が洩れて、ほろつと涙に噎じた。

「御免下さいませ、お歸りなさうですが、お寝みて御座いますが、少し御目に懸り度いのですけれど、」

我れにもあらず、女の聲を耳にした幸彦は、愕乎として筆持つ手を止め、障子の外を覗くやうに見る。

「若し、お寝みて……」

「否、寝むぢや居ませんが、御用がお有りなら、お入り下さい。遠慮は在りません。」

「左様で御座いますか、ては失禮を致します。」

「さあ、何卒……、やあつ、お前か……」

「はい、清子です。」

眉を寄せて、齒を噛み鳴らした幸彦は、厭な思ひを抱いた。そして或るものを壓せられて、其弱いを見出されたかのやうに、口惜しげに睨みつけ、

「否、貴女でしたか、何の御用か知ら無いが、貴女に會ふ必要を認ないのですから何卒戻つて下さい。」

「はい、何れは戻らねば成りませんが、是非お目にかゝり、御相談致し度い事が御座いますので、」

「もう貴女の御用や、御相談には關係度く無いのです。さあ、お戻り下さい、戻らなければ考へも有りませぬ、失敬な、女と云ふ動物は、貴女ばかりぢや無い、總てが大嫌ひです。」

「あら、強い御立腹ですこと、けれど、奥様だけは別ですものね、ほ、ほ、まあお可愛がつて……」

「お黙言なさい、失敬な、妻の事にまで、貴女のお言葉は受けません、失禮な、實に、貴女は般若だ。」

「ほ、ほ、ほ、まあ、般若に見えますか、ては貴方は瓢突古面ですわね、ほ、ほ、まるでお神樂のやう……」

「え、つ、失敬な、般若と云ふは、外道、悪魔を云ふのです。貴女は悪魔だ。絶ず僕の心中を動搖させ、」

「ほ、ほ、動しなざるやうなら、意志の弱いのと良心の苛責がっらいからせう。御尤もですとも……」

「あ、もう何も聞き度く無い、歸つて下さい、否、お戻り下さい、其方へ……、外へ、去つて下さい、」

「はい、参りますよ。去くなと言はれても、出て去きますがね、若し、貴方、其様恐い顔仕無いて、まあお聞き下さい、貴方と、妾とが、以前夫婦で在りました

時、其愛の結晶とも云ふ可き、可愛い子供を、苦しい思ひして、妾は生ました。そりや、お別れする時は、妾が悪、薄情となつて、怨まれましたのも、彼の子が可愛いからです。彼の子を闇から暗へ遣り度く無いからです。貴方の意志とも云ふを續せ度いからです。と共に、貴方を社會へ生して、貴方の腕を期待させ度いからなりました。誤解を受けるのは、覺悟して居ました。

思出をたどるか、涙を拭いて、濡れた眼に、凝乎、幸彦を仰いで、ほろ／＼と又涙を落す。

「……………」

「はい、自由な言葉と、必度思し召しなされてせうが、之れが妾の誠心から出る。誤解を解く言葉です。何卒其のおつもりでお聞き下さいまし……」

「……………」

「案の通り、貴方は、誤解遊ばして、妾のやうなものでも、お戀ひ下さつてのお怨

み、妾は、嬉しいと思つて居りました。併し、一端お怨み遊ばした以上は、其誤解を解くまでには、容易なもので無いのを承知して居りました。何日も、貴方が、妾に對つてのお言葉で、理性の女だ〜だと云はれて居りましたが、理性の女でも、苦しいのは情で御座いました。貴方、其の情が、痛酷に、此胸を突きましたの……」

「……………」

「……………けれども、貴方を御出世させ度いと存じ、妾は尙ほ鬼に成りまして、子を……可愛い子供を捨てるやうに、里子として遣はしました。それが、より以上の誤解を招きまして、貴方は……、貴方は……」

「……………」

「怨むくらの、戀して居て下すつたのにも……妾は、貴方に捨てられてしまひました。鬼になつてまで、貴方を想ふ妾は、薄情、憎い女として、捨てられて終つたので御座います。」

「そして、奥様を……と、伺ひました、時の、妾の胸の中の苦しさ、泣いて〜明した夜は、何度も在りました。手紙も書きました。」

「……………」

「けれど、妾は、貴方を捨てません、誰人が何と云ひましても、よし、此體が汚され、他家の妻と成りましても、貴方を捨てません。捨てられるものですか。」

「……………」

「今年に成るまで、貴方に對する貞操は、守つて居りました。處が……既に……、此尊かつた貞操……」

「えつ……………」

「御安心下さい、妾も、遂に貞操を忘れて、虚榮の憧憬者と成りかけました。貴方に對する。或る誇りの勝ちを得ようとして、汚無い女になりかけましたが、神様は、危ない處を、お救ひ下さいました。貞操を、全うする事を、強られました。」



「それも、之れも、貴方を想ふからで御座います。」

「……………」

「貴方、貴方は之れ程まで、戀つて居ります妾を、未だお怨みなさつて在つしやるのでせうか、妾は、貴方を、逆に怨みます……………」

語りながら涙のはら／＼と溢れ落るのを、拭ひ拭ひする清子は、耐らない胸の悲

苦に、咽鳴ぶ唇の聲を震はせながら、恨めし氣に、幸彦を仰いで、

「ねえ、貴方、未だ、妾の心がお解りになりませんか、妾は、甚麼思ひしましても……………」

「……………、まあ待て、」

「は……………」  
沈痛な言葉を、思はず洩した幸彦は、昵乎、清子を覗いて、睜つた眼へ涙を浮べ……………だが、

「よく解つた。假令それが、僕を偽らうとする言葉でも、其中には誠の温かい情も潜ひて居やうが、貴女は、僕に、怎麼せようと言ふのか。」

「……………」

「元々通り。夫婦に成れと云ふのか……………」

「……………」

「泣いて居ては不可、之れ迄云うた言葉を、急に弱くするのは、理性の……………、否、怎麼しようとする……………」

「申します。はい、申しませう、」

「うむ、聞かしてくれ……………」

「はい、申します。貴方は、二人の間に出来た子を、可愛いと、お想ひなさいませうか、それとも……………」

「……………」

「お憎しみて……」

「むし……、清子……さん、貴女は、怎麼思ふか知ら無いが、子の可愛く無い者があらうか、僕は、可愛い……、否、可哀想でなら無い、親が満足であり乍ら、両親から捨てられたやうに、里子へ出された子を、何て憎いと、思へやう。可愛いと云ふよりは、可哀想だ。可哀想……、可愛いと思へばこそ、隠れて逢にも行つた。子の可愛さに、逢ひに行つた心の中には、貴女の様子……も聞き度いからだ。憎い女怨みの女と、思ふ下から、子の可愛さには、貴女への微動……の想ひもある……」

「貴方……」

「清子さん、僕はね、貴女の厚い情の在るのを、能く知つた。濟ないと思ふ。けれど、貴女が要求しようとする事は、不可能ですぞ。」

「えい、覺悟して居ます。奥様のお在りを……、藝妓と云ふ、賤しいと云へば、語弊です、がそれ迄に成つてまで、貴方へお盡しになる奥様の……」

「清子さん、妻で在つた女の事を、何卒言は無いて下さい、僕は、それを聞くのが痛い……」

「えッ、彼れ程まで、喜じてお在だつた奥様を……」

「そりや、今でも喜んで居る。けれど、もう僕の……」

「えい、何で……」

「否、何もお聞きなされるな、清子さん、僕を、それ程思つて下さるなら、彼の子供を引き取つて、僕だと……ね、頼みます。必度、生命が在れば、幸福を持つて行きます。」

「貴方、それ程、子供が可愛いですか。」

「親は脱空とか云つて、子に愛の無いものは……」

「では、妾は、彼の怎麼なるのでせう。」

「僕のやうな者にでも、美しい貞操を守つて居て下すつたに就いては、有りが度いと、深く謝します。けれど、もう一妻は持ちません。女の生命を、僕は買ふ程の

満足まんぞくを興おこへられませんか……」

「爾そうて御座ございますか、宜よろしう御座ございます。」

「え、彼のあ子供こどもを引き取とつて……す、濟すま無ない……」

膝ひざへ兩手りょうてをついて、思おもはずはらくと涙なみだを滾こぼした幸彦ゆきひこは、氣高けだかさうに、清子きよこの顔かほを仰あやいで、希望きぼうに満みちた微笑ほくそみをする。人知ひとしらぬやう、涙なみだを拭ぬいた清子きよこは、横よこ向むいた窓まどへ眼めを移うつせば、漁師いし夫婦ふうふの船ふねから、子供こどもを抱だいて、頼たのしそうに濱はまへあがつて來くるのを、眺ながめて、吻くちつと、力ちからの無ない嘆息ためいきをした。

## 同

## 三

薄情はくじやうな男をとこだぜ

「梅うめとさくく櫻さくらはいづれ、兄あにやら弟かといやら、わきて云いはれた花はなの色いろへ、あやめかきつばたは、何なにれ、姉あねやら妹いもうとやら、別わかて云いはれぬ花はなの色いろ、西にしも東ひがしも、みんな見みに來きた

花はなの顔かほ、さやうへ見みれば、戀こひぞます……」

合あひ三味線のつてが、吾妻家あづまやの格子窓れんじまどから、通とほりを越こすと、大川おほがはへ反響ひびいて對岸かかしへ消きえて去ゆく。

「何なんだね、確しつりお唄うたな、眠ねむさうな、爾そんな事ことツて御飯ごはんが食たべられるかい、さあ、確しつり聲こゑをお出だし……」

「え、ですけど姉あね妓あしさん、昨夜ゆうべ無理むりに……」

「何なん云いふんだよ。唄うたやア可いいんだつてば。」

稽古本けいこぼんを前まへに、丸子まるこが半玉はんぎよくの豆子まめこに、長唄ながうたの京鹿子道成寺きやうかごのちだうじやうじを唄うたはせて、暑あつさうに三味線さんまいせんを弾ひいて居ゐる。

「……恨うらみくいて、かこち泣なき、露つゆをふくみし櫻花さくらばな、さはらば落おちん風情ふぜいなり。「おもしろの四季しきの眺ながめや三國さんごく一の、富士ふじの山やま、雪ゆきかと見みれば、花はなの吹雪ふぶきか吉野山よしのやま、ちりくるく嵐山あらしやま……」

縁側えんがはの處ところで、楊枝遣やうじつかひ乍なら、朝顔花あさがおを見みて居ゐた、吾妻家あづまやの主人あるとし吾作ごさくは、肥満でんぱんした

體を捻むけるやうにして、

「丸ちゃん、何は怎麼したい、小繁は……」

「復手紙を書てますよ。二階で……」

「爾うか、彼妓にも困つたな。」

「主人ばかりぢあ無い、料理家さんが困つてます。」

「爾うだらうね、もうあれに懲て、亭主の在る藝妓は抱かへまいよ。が、彼妓は別だね。」

「別ですとも、特別よ、厭に貞女顔しやがッて、谷中か、青山へ行きあ可宜つたのに、此様處へ迷ひ込みやがッて、眞實に浮ばれ無い代物よ。」

「はッはッ、谷中や青山ッて、此度其處へ藝妓やても出来たのかえ、はッはッ、墓場へ……」

「え、出来たんですよ。貞女々々だとか、信女が多山並んでるぢや無いの、墓場

にさ、彼處で、阿呆多羅經でも唸つてりや、お鳥目に在りつくのに……」

「はッはッ、可哀想に、豊や不具の乞食ぢや在るまいし、彼れだけの容色でね、乞食も……」

「怎麼せ爾うてせうよ。妾なんか……おい豆子ちゃん、何傍見てるんだい、確りお稽古しないかよ。冗談ぢや無い、宜い藝妓にして遣らうと思ふのに、有りが度いたあ思は無いてさ、怠る奴が有るかよ。妾の氣も知ら無いで、何て態だ……」

「御免なさい、あれ姉妓さん、一生懸命唄つてるんぢや無いの、痛いわ、叩いて……」

「何が一生懸命なんだい、復痛いよ、妾や般若面して居るんだから、人情が無いんだよ。態あ見やがれ……」

「これ、何を言つてるんだい、私が何か云つたからつて、何にも知ら無い、豆子へ諷こする事は無いぢや無いか、可哀想に……、豆子も爾うだよ。姉妓さんが、

汗流して教へてくれるんだから、怠たり何か仕無いてね、確り唄ってくれ無さや不可  
ないよ。お前の爲めなんだから……」

「え、濟ません、姉妓さん勘忍してね。」

「何云てやがるだい、勘忍面が在るかい。」

「たゞ頼め、氏神様が可愛がらしやんす。出雲の神様とやくそくあれば、つい新枕、  
さにと戀すれば、浮世ぢやへ、ふかい中ぢやと云立て、こちやくよい首尾で憎  
らしい程、いとしらし、花に心を深み草、園にはいろ宜く咲き初めて、紅を……」

と冴えた音が、街路に消える。先刻つから、吾妻家の前を、往つ戻りつして居た小  
繁の父親萬兵衛は、思ひ切つたとはばかり、格子戸へ手を懸けて、そろりと開けながら、

「御免下さい、今日は、御免下だ……」

「はい、誰人……」

丸子の、合の手を弾く間、それに氣を取られて、次ぎの唄をあはせる。三味線を

待つて居る處へ、萬兵衛の訪ねたので、返事と一緒に立ちあがつた豆子は、昵白乎  
萬兵衛を見るより。

「あら、小繁さんのお父様……」

「へッへッ、豆ちゃんも居るんですかえ、彼の濟ませんがね、小繁の奴に、親父が  
來たつて、一寸お頼みしてえのですが、會しちや下れめいてせうか……」

腰を蹲めながら、額を撫てた萬兵衛は、浮ついた笑ひを續けて、奥を透隙やうに  
覗いて居る。

「小繁さんに、爾う、一寸お待ちなさい、彼の旦那様、小繁さんの父様が……、會  
せろつて、怎麼しませう。」

火鉢の前で、新聞を見て居た主人は、格子戸の方を眺めたが、豆子へ顎て何やら  
云うて、煙管を執る。

「は……、小繁さん、呼びてますよ。」

「はさ。」

二階を仰いで、小繁を呼ぶ豆子の聲に應へた、二階からは、片手に書きかけの紙を握つて、下階を覗き乍ら、階段を踏む足音を軽く、小繁は下へ来る。

「何か御用……」

主人の前へ坐り、片手を疊へついで、亂れかゝる頭髪の毛を、蒼蠅氣に掻きあげる。「用つて、何だ。お前の親父さんが、會てえつて来て居なさるからね、それで呼びだのさ……」

一服吸つて、強く喫つた。煙草の煙を出しながら、ぼんと火鉢の縁で叩棄いて、主人は新聞を手にする。

「父親が……、爾うですか。」

主人の前を立ち上つた。小繁の顔は曇つて、眉を寄せたまゝ、入口へ出る。小繁の姿を見た萬兵衛は、急に莞爾笑ながら、片足あがりかけ、

「お繁か、少し急用でね……」

「お父様なの……」

「お前の爲めには、大事件なんだ。俺でせい腹の立つ事なんだぜ。おい、親なればこそ、飛んで来たんだ。」

「また、大仰な、貴父の大事件や、大變は聞き飽いてるんだよ。まあおあがり爲さいな、何だか知ら無いが……」

「上つて宜いかい、まあ御免よ。へい、皆さんも早う御座います。おつと、今日はお暑うがす。」

「何云つてるんだよ、さあ、二階へお出でなさい……」

先へ、萬兵衛を上げた小繁は、臺所に居た女中に、氷を誂へながら、憂鬱しいやうな態度で、後から二階へ上る。

「暑いなあ、怎麼だ、急いで来たもんだから、此汗を見てくれ、ぐつしより濡ら

やつた。肌を脱げ……」

「……、用つて、何なの……」

「まあ待ちなよ。急なくつても、話さずには置かれ無え事なんだ。暑い〜、自棄に暑いな。」

「暑いつて、今氷水が来るわよ。それに又、妾に會た義理ぢや在りませう、甘味取り込んで無心でせう。」

「冗談云なさんな、夫れ處ぢや無えのだ。厭にお前は落ついて居るが、俺あ斯うして居ても、氣が急々するんだよ。何にも知ら無えお前は、氣の良いものさ。」

眉を凝めて、慌てたやうに、團扇を手にした萬兵衛は、尤もらしく、氣の毒氣に小繁を眺める。

「ぢや早く話たら宜いぢや無いか、お前さんこそ悠然して居るぢや無いの、冗談ぢや無さ。」

「話すがね、驚いちや不可無えよ。彼の何だ、お前の亭主のね、大葉つてえ奴は、薄情な男だぜ。散々お前の世話に成り乍ら、昨夜遅く來てな、寢て居る俺を叩き起して、何を云ふかと思つたら、お前と別れて來れつてさ。俺あ始めは、冗談とばかり思つ……」

「お父つ様、冗談も休み〜お言ひ、他の女なら眞實にするだらうが、妾や其の手にや乗ら無いよ、」

「だからよ。俺も、眞實にや仕無かつたんだ。處が怎麼だえ、ほら、此百圓てえ金を出してね……」

「しつ、お金……」

白眼然、萬兵衛の出した金を眺めて、颯と顔を變へ、唇を噛むだ小繁は、後の言葉を待つ。

「爾うよ。種々お繁にや世話に成つたが、少し仔細が在つて、遠方ぢや無え、他の

女と夫婦に成るんだから、澤山あげてえが、目下の處は之れて置いて、何れ復話もつけるで、まあ別れて貰え度えつてね……」

「え、ッ、知らなかつた。まさか……と思ふが、夫れぢや彼のお嬢様……だ。華族とか云ふ……」

「まあ腹を立つには早い、其處でな、俺もむつとしたから、百や二百で、繁を引き取れ無えつてね、怒鳴つけて遣つた。之れもお前を思ふ親だからだぜ。するとな、後から千圓位まで出すから、一時之れで我慢して置いて貰ひ度えつてな、否應無し縁切りに來やがつたのよ。俺も憤としたが、幾干お前が惚れて騒いても、相手に氣が無さや、反つてお前の爲めにも成ら無えとね、爾う思つたから、ぢや此金は預つて置きやせう。お繁が何と云ふか知ら無えが、お前さんの方で別れてくれつてえなら、繁も氣が軽く成るだらうし、繁の爲めだ。實は隠して居たが、繁の方でも、お前さんの様な、見込の無えものには、もう既から愛想が盡きて居やしたつて……」

「お父ッ様、な何を云ふんだよ。何日妾が……」

「だつて、爾うぢや無えか、彼方から別れてくれつてえのが癪だから、俺の方でも云つて遣つたんだ。」

「餘計な言、随分なお前さんだよ。え、ッ、何だつて金なんか、受け取つたんだよ。妾や去られるやうな悪い事は仕無いんだ。え、ッ、縁を切られたり、別れる事は出來ないんだよ。假令幸彦が何と云つても、妾や別れられるものか、誰人が別れるものか、」

「あ、これさ、爾う怒つた日にや、何も成ら無え、否其の何だ。だからさ、斯う……つと……」

「え、ッ、知ら無いよッ、」

「知ら無いッたつて、俺が困らあ、お前の爲にや、別れた方がと考へたからよ。泣かなくたつて……」



「知ら無いッ、」

わツと泣き倒れて、體を掻きむしるやうに悶えた。小繁は、何思つたか、轟然と立ち上り、後の簞笥へ手をかけて、夏帯に、羽二重組の羽織と、明石お召織の單衣を出して、手早く着替ながら、物をも言はず、階下へ降りかゝる。

「之れお繁、俺一人置いて、何處へ行くむだ。」

「知ら無いッ、」

押へた袖を振り放つて、どん／＼と階下へ降りて去く。水に解つた氷を、萬兵衛は手にして、

「之りや大變だ。稻毛へ行かれて、幸彦に會れちや……」

慌て出したが、手にした氷の水は放さず、一息に飯干して、軒の風鈴をかすめる風を、冷りと受けた。

同 四 吹いやうで

「貴方。それ程までに、子供が、可愛いので御座いますか、二人の間に生だ。彼の子が……」

清子は、船から上陸つた。漁師夫婦が、子供を仲に家路へと歸る楽しさうなのを、羨やましく見送つて、忍と涙を拭ひ、繰り返すやうに言ふ。

「何度言うても、同じ事で、僕は子の親……だものな。」

兩腕を組むて、長く引いた息を、深く吐く嘆息を苦しさうにして、眼を閉ぢて終ふ。

「貴方、それ程可愛ければ、何故親子三人居られ無いのでせう。愛に據つて生だ子は、夫婦を永久に結びつける、愛の紐では無いでせうか……」

「……、それが出来れば、僕は、愚痴も云はぬ、喜びで貴女の厚意を受け、過去に變る、子に依る愛の家庭を造り度い。が……、もう僕は、妻に因る、精神的の苦痛が爲度無い、妻女に求めらるゝ慰安も、愛も、戀も仕度無い、對國家社會的の戀、敵を僕は求めて、其慰安の表、裏とに生てゆき度い、否、獨りて生てゆくのです。充實した社會を、造つてゆくのです。」

組だ腕を、扼すやうに解いて、力の在る聲に語つた幸彦は、涙で顔面が濡れて居る。活と睜つた眼には、哀愁の氣が漂ようて、永くは開て居られなかつた。

「では妾に、子を抱いて、何日までも居よと云ふのですか、そ、それは慘酷でせう、あ、餘りです……」

頰るやうに、體を伏せて、よゝと袖を噛み、泣かじと咽鳴ぶ清子は、又、怨めし氣に仰いだ。

「泣いて下さるな、貴女が泣くより、僕が泣き度い程、苦しい想ひをして居る。こ、

此の胸が痛いッ、」

「之れ程まで、お願ひしても、貴方は妾に、貞操を守れ、獨身で居よと云ふのですか……」

「莫迦云ふちや不可、貴女は誤解して居る。誰人が貴女に、貞操を強た。獨身で居よと云うた。子供を育て、呉れと云ふたのは、貴女を妻……、否、子の親と思へばこそだ。子を思ふ僕は、貴女を妻……、子に依つて、絶えず復活される心の象動で別れた女に、何の未練が残らう。貴女にはお氣の毒だが、形骸を結ぶ夫婦の復活はもう消灰されてしまつた。」

「……………」

「灰に成つても、多少の温みは在る。其温かいのが未練にも、過去の思出を語つて子を貴女に頼むのだ。之れ程云ふ僕の心が、貴女には通ら無いのですか。」

「……否、能く解つて居ます。」

「解つてくれたなら、僕の要求を入れてくれても宜いてせう。それが入れられ無いのは、貴女と云ふ體へ感ずる寂寞から、僕の體を求めやうとするのでせう。」

「……………」

「ね、汚ないぢや在りませんか、此位汚ない愛は無いてせう。事實貴女が、美しい精神から、僕のやうな者でも、愛すと云ふ想ひが浮んで居るなら、其美しい誠心を見せての上に、僕の愛を求めたら宜いてせう。」

「貴方、妾は五年間貞操を全うしました。」

「はッはッ、そりや不可、其れだけの貞操が、何の功がありませう。又、僕の愛を受けやうとするに、何れだけの力が在りませう。況して冷水のやうに成つて終つた現在の僕には、愛情の熱を沸湯させる事は出来ません。何卒それだけ貴女に思し召しがあらば、彼の子供を可愛がつて下さい。」

「……………」

「ねえ、清子さん、誤解仕無いて、苦しい僕の心中を察して、子供の上を頼みます。」

「……………」

「清子さん、聞いてくれるでせうな」

「……………」

「黙言つてお在の御様子では、御不承知なのですか……………」

「……………」

「御不承知なのなら致し方が在りません、もう頼みますまい、彼子は可哀想だが、現在の僕として、引き取るのは不可能ですから、涙をのむで……………、僕は彼子を棄てませう。もう願いますまい、意氣地の無い僕を親にした子供には、可哀想だが、致し方が無い、」

「……………」

「嗚ぞ彼子は、慘酷な、無情の親と怨むだらうが、生死さへ定かなら無い身には、反つて子供の爲めに、幸福であらう……、噫々、致し方が無い。」

「貴方、彼の子を妾が引き取つて、養育をするとすれば、妾は、貴方と、何日か夫婦に成れるのでせうか。」

「さあ、神ならては、此神祕は解けますまい。」

「貴方、何卒妾に、死ねと云うて下さい、殺して下さいませ、黙言つて子供と、貞操と、寂寞の苦痛を味はせやうとするのは、死の宣告を與へるやうなものです。精神的に殺されるのです。」

「清さん、清子さん、未だ誤解して居ますな、僕は、貴女に、死ねとは云はん、殺しませんが。貴女の自由は束縛しやしませんよ。子を引き取れと云ふても、唯だ愛を與へて遣れと云ふに、止どまるのです。無遠慮に云へば、貴女は、餘り理性から來る情が、一時的に興奮して居るらしい、何卒冷静に成つて、能くお考へ下さい、も

う僕は、何も云ひも、語りも、頼みもしません。獨身で亡びて去るか、生を求めて社會へ出るか、先づ身から定めませう。」

「貴方、妾は、彼の子は引き取りますまい、否、引き取れません、夫婦で居てこそ可愛い子です。生て居る貴方と云ふのが眼に寫つて居る上は、妾には子の可愛さが憎く成ります。貴方は、之れ程薄情ぢや無かつた。慘酷な方とは思ひませんでした。」

「……………」

幸彦は、眼を閉ぢた儘、軀動きもせず、蒼白に成つた顔の眉の邊りが、苦しうに微動して、澁めては吻つと嘆息吐るのが、悲痛の炎のやうだ。

「子供に對して、それ程情が在りてしたら、妾も可哀想ぐらゐ思し召し下すつても、妾は……、冷淡に成りましたわね、薄情ですわね、妾は、妾は怨みます。恨むて怨むて、必度此怨みは……、」

涙に、濡れた眼を光らせて、怨めしさうに昵視る清子を、冷やかに眺めた幸彦は

微笑ひて居る。

「貴方、能くも妾を殺してくれました。殺された妾は、此儘では居ません。必度晴します。貴方、お忘れ下さいませ。女の執念の強いのを……」

「莫迦な、爾云ふ貴方は、僕を愛して居るのぢや無い、はッはッ、まあ宜ろしい、お怨み下さい、怨まれませう。併し、僕は、其の怨みを受けません。如何なる手段を執る怨みでも、僕は厭だ。受けませんぞ。」

「爾うですか、妾を殺した貴方へ、妾は記念をお送りします。永く忘れられ無い、妾の心を差し上げます。」

「没常識言を、云ふものぢや有りませんぞ。」

「否、没常識言ぢや有りません。情の無い貴方へ、苦しい妾の情を御覽に入れるのです。貴方へ、情を知らしてあげます。情を作らせてあげます。」

「……困つた女だ。」

「貴方、幸彦様、もう之れて逢ひません。會ふ時は、妾から會ひには來ません。貴方の方から會ひに來るのを待ちます。けれど、其時、果して會へるか否かは知れませんが、誠の子に對する愛を、御覽に入れます。では、御體をお大事に……失禮します。」

盗る涙を拭いて、悄然と立ち上がった清子は、去り難い情のひし／＼と胸を襲うて、過去の思出に依る情を繰り返すかのやうに、わつと泣き倒れかゝつたが、思ひ切つて歸り支度を仕た。

「清子……さん、か、歸つてくれますか。」

「貴方……」

「否、坐つちや不可、か、か、體を……」

「あ、貴方……」

片膝突いた清子は、俄破と幸彦の膝へ泣き絶つて、よ／＼と咽鳴ぶ脊を、撫でるや

うに抱かへた幸彦は、寂寞になつてゆく身を顧りみて、暗然とした涙に苦しむ。

「え、つ、未練な、さあ歸つて呉れ給へ。」

押し遣るやうに、清子を膝から放して、衝つと體を横向けながら、吻つと肩で嘆息吐た幸彦は、急に痛んで来たか、胸を抱かへて、机へ凭り懸かつた。

「はい戻ります。けれど幸彦様、妾のする事に就いて、怨むて下さるな。恨むては……ね」

怨みません、如何なる事が湧うとも、驚きも仕無いが、恨みにも思はん。さあ歸つて下さる。」

「え、歸ります。」

「……………」

「諄いやうですが、お體をね……」

「有りが度う。」

思ひ有るや意を残してか、後振り顧りがちに、出で清子の胸は、興奮する神経を押へて、泣かじと怨めしげに、街路を眺めた。見まいとする幸彦は、思はず立ちかけた腰を下ろして、冷やかに、自己を顧り見て笑つた。

「御免下さい、大葉様は此方で……」

「はい、爾うですが、誰人ですか……」

怪訝な面態をして、入口の障子を眺めた幸彦は、片手を机に置いて、體を起しかけると、外から障子が開いて、俣夫らしいのが、四五歳の兒童を座敷へ登らせた。

「あ、行彌……」

眼を睜つて、愕然とした幸彦は、唇を結んで、去つた清子の後を睨むだ。俣夫に抱かへられて、座敷へ入つた行彌は、不思議氣に四邊を見廻し、わつと泣き出す。

「若し坊ちゃん、泣いちゃ不可やせん、あ、善良子だからね、泣くものぢや有りやせんよ。え、旦那様、唯今待つて居りましたお茶屋へ、奥様がお見えに成りやして

此坊つちやんを、此方へお渡し仕ると云はれやしたので、何卒……へつへつへつへつ。」

「うむ、爾うか、御苦勞だつた。確に受け取つた。」

「へい、ぢや御免下さい。」

「む……」

「お母様ア、あんく。」

泣き叫ぶ行彌を突如抱へた幸彦は、障子の外の縁に踏み出した體を、慟と落してはらくと涙を流した。

「お母様ア……」

「お、泣くな、行彌、俺の方が泣き度い、お前は此幸彦の強い子だぞ。泣いちやあ不可、お前が泣くと、お父様が弱い男に成る。泣かずにな、強い人に成つてくれ、もうお前は、永久も、此お父様の子だよ、大葉幸彦の可愛い大事な行彌だ。もう怎麼事があらうと、お前は離さ無いぞ。はッはッ、お前のお母様は、情の力で弱い男

に仕様としたが、お前を抱へた幸彦は、反つて強い希望が認められた。」

「お母様ア、あんく」

「む、泣くな、之れからな、お父様が、お前ひとりを可愛がつて、希望を慕つて生てゆくのだ、む、爾うだ。行彌、泣くな、お、泣くな。」

「お母様ア……」

我が子を、確と抱へた幸彦は、耐らなく清子の後を望むで、悲慘い光景に成つた身の上を、怨めしげに泣いた。

同 九

妹を横取りして

「怎麼しませうね」

緑葉で隠れた、山王臺を、老志士として、國難に處して名ある、江頭家の二階か

ら眺めた、小繁は、葎戸を脊にして、馬賊頭目と呼ばれて居る、鑛山業で蒙古探検家三原甚作を仰いで、眼が涙に濡れて居る。

「む、怎麼しやうからうて、そりや困つた事に成りよつたな。實は僕も、過日の夜會つた時、直ぐ稻毛へ行つて、久しぶりて幸彦君に會ふつもりぢやつたが、支那から愚な事ばかり云うて來よつてな、明日は明日はと、遂ひ尋ねんぢやつたが、む、併し、之れには、何か仔細が有るぢやらう、餘り早計な事しよつて、反つて何ぢやらうと思ふが……」

「はい、妾も始めは、信じちや居ませんでした、お金まで出されて、縁切つてくれと云ふのですもの、それに、幸彦は、非常な神経家として、口では言ひませんが妾の此の藝妓に無つたのを、餘り喜ばないで、何の爲めにと云ふのを忘れて、貞操に疑ひを成さるのでせう、妾は、此藝妓には成つても、幸彦をと云ふ考へので、外に野心なんか有りや仕無いです。況て、女の大事な體を、怎麼容易と汚されませ

う。金や肩書が戀しくつて、體を汚す位なら、幸彦と夫婦にや成りませんわ、それをく……」

「はッはッ、まあ宜しく、解つた。貴女の心中は察しちよるが、何の爲めに幸彦君が……、それ程迄に盡しちよる妻君を棄るのか、我輩は女に縁が遠いからよく知らんが、貴女がそれ程心配しよる精神が氣の毒ぢやで、之れから兎に角、稻毛へ行つて見よう。」

「えッ、是非御出下さいまして、幸彦の精神を直して下さいまし、そして、豫て研究して居ますものの成功をしてくれますやう、貴方から能く云うて下さいまし、お願ひです。妾は、社會の人の前へ對しても、あの研究の成功を、是非させないぢや置きやしません。」

「能く云うた。宜ろしい、輕舉で夫婦の別離が出来るか否か、幸彦君に聞くとしよ、それに用もあるぢやで、併し、之れが事實で在つたら、何方を善意に解釋しよ



うが無いが、事に依れば、幸彦君に絶交せにや成らん、む、兄弟のやうに、永年交際して居て、久しぶりて戻つて来れば、没趣味事を聞く……」

「那麼人ぢや無いのですが、怎麼したのでせう……」

「む、ぢや話すが、實は、僕と幸彦君とは、兄弟のやうに交際して居るのは外見で僕は餘り幸彦君の行動について、面白くないのだ。」

「えッ……」

「貴方は知るまいが、幸彦君は、あれで中々艶福家なのだ。妻が在つても、他に花を見れば、古い花を顧みないのが癖で、それが爲め、幸彦君の爲め、何人泣いて居るか知らんのだ。」

「……………」

「僕は、それを再三聞いて居るので、此度の事につき、餘り氣乗りせんのだぢやよ、ぢやから貴女もな、骨になるまで惚込込んで、宜い加減に別れた方が、反つて爲め

ぢや、無いぢやらうか。」

「えッ、別れるッて……………」

「うむ、別れた方が、貴女の爲めぢや、悪い事は云はん、お別れなさい、僕は、それを賛成する。」

「……………」

「別れられませんか。」

「はい、之れ程までに成つても、妾は別れません……」

「むッ、別れられ無い、はッはッ、それでは仕方が無いが、實はな、何故僕が、別れるやうに言うたかと云ふのは、僕の友人で、高時學藏と云ふのが在る。此男が、貿易會社の社長の妹と、夫婦關係を祕密に結んで居た。處が、幸彦君が、其妹を横取りして終つたので、高時は、非常に口惜がつた。そればかりぢや無い、高時が、己れを飾る爲めに、兎角友人を中傷するとも無く批評するのだ。それを幸彦君が聞

き、江戸つ子云々を嘲笑した機會を見て、非常に高時を訓話たのか、嘲罵つたか、攻論したらしい。」

「それは、貴方だと……」

「えッ、はッはッはッ、莫迦云ふちや不可、幸彦君は、僕が其……否、何だ。えッ、中間に在つたので、誤解しちよるのだらう。僕が何で……、貴女までが誤解しちや不可、僕は、貴女の身の上を思ふから、復讐ぢや無い、爲めだから忠告するのだ。」

「妾、貴方の仰しやる事が、何ですか解りませぬので……」

「ひい、爾うですか……」

「幸彦の話では、俺は、氣の毒な事をした。三原君の情人であつた、或る會社々長の妹が、厭らしい事を仕かけた。けれど、三原君の情人と知つて居たから、柳に風と受け流して、相手にはしなかつた。それに、三原君は、見かけに依ら無い男で、兎角友人を中傷して不可、彼の男の將來を考へて、江戸つ子を悪罵した際、大いに

攻て遣つた事が在る。併し、彼の男の將來を思ふからして、人格をつくつて遣つたのだと云ふて居りましたが、まあ、貴方ぢや無いのですか……」

「はッはッ、僕だと思ちや困る。それからして、僕は幸彦君の行動言動を喜ばないのだ、」

「それなのに、何故幸彦は、貴方を慕つてるのでせう。」

「さあ、僕、それからして解らん、何か、僕に對して、野心があるのだらう。それで無くば……」

「爾う云ふお仲とも知らず、飛んだ事をお願ひしました。幸彦が、能く貴方の事を申しまして、俺は、三原を信じて居る。友人間を中傷したり、何かするが、あれだけの男で、將來に見込のある野心家だから、友人として、氣を許して居る。總てを語つて居る。可愛い男だなどと申しましてね、何か一身上の出來事があつたら、相談相手に成ると申して居りましたものですから、遂ひ爾うとは知りませぬ……ま

あ、何と云ふ幸彦でせうね。」

「はッはッ、俺に金が無いのだ。あると見たり、且つ友人をよく救ふものですからそれで、僕に頼れと云ふのでせう。」

「成る程ね……、爾うて御座いましたか。」

「併し、貴女の御頼みは、承知しました。今日はもう遅いから、明日一番の汽車で行くとして、貴女今夜宿つて行つたらんぞ……、何、差し支へ無い。」

「宿……、ほ、ほ、家が在りますから、御親切はお禮しますが、あ、何と云ふ幸彦でせう。之りや必度、稻毛で過日、華族さんのお嬢様と……、えッ、必度爾うだ。それで縁が切らうとしたのだ。それであのお金を……、え、つ、口惜いッ、」

「ど怎麼しよつた。確りせんぢや不可、泣いちや不可ぢや無いか、其通りだ。僕の言ふ通り。他に女が出来たので、それで縁を切らうとするのぢや、ぢやから僕は、此際、餘り氣が乗らんので、過日貴女を救つた時、僕は、本來ならば、支那から歸

つたばかりぢやから、直ぐ訪ねるのを、斯うやつて訪はんのぢやらうが、人格、品性の下劣な幸彦君を、僕は友とは思つてやせんのだぢや。」

「そ、爾仰しやれば……、えッ、怎麼したら……」

「まあ、氣を鎮めなさい、でまあ、今夜は宿つて行つたら宜からう、それが貴女の爲めぢや、はッはッ、僕の虚らぬ精神も解るてな、怎麼か……」

「はい、有りが度う御座いますが、今夜は歸ります。」

「歸る……、怎麼しても……」

「はい、未だ終列車もありますから……」

「えッ、ては何ですか、稻毛へ……」

「はい、之れから参りまして、直接會つて見ます。」

「むッ、そりや困つた。否、何、僕が行つてあげるから、心配せん方が宜からう、て宿り給へ。」

「否、怎麼しても、参ります。」

「怎麼しても、む、爾うですか、ては仕方が無い、行くも宜いが、僕が斯う云うた事はね……」

「はい、決して申しやしません。」

「爾うですか、けど、宿つて、明日にすれば……」

「お言葉は、有りが度う御座います、之れて失禮します。ては、また何れ……、怎麼も……」

「否、お構ひせんぢやつた。」

櫻並木の坂を上つて、江頭の家から、三原に別れ出た小繁は、親友とまで思つて居た、幸彦と三原との仲を思ひ競べて、自分の現在さへ解ら無く爲つた。

三原の爲人に就て、幸彦が言ふには、友人間を中傷して、能く物議を起させるが若いから、と云うて、幸彦も幾干も違は無いが、一身上を飾る爲めに、友人間を中

傷するだけに止どまつて、案外同情のある男だから、憎いとは思はない、それに國家社會の爲めに成る男で、末の見込みの在る友だと、蔭では喜びて話し合つて居るのに、何故三原様は、反對に、幸彦を嫌がるのだらう。して見ると、三原様の云ふのが誠言で、幸彦は、確りして居る三原様を友として居るのが嬉しいので、あゝやつて賞めて居るのでせう。必度爾うだ。友の少ない原因も、幸彦の性格の爲めて、誰れも相手に仕無いので、彼の三原様を一人、頼りにして居るのだ。それに相違無い。あゝ、何と云ふ幸彦だらう。妾が、之れ程までに盡してあげるのに、妾をもう用が無いからと、離縁するなんて、あゝ見違へてしまつた。夫と思へばこそ、苦勞もするのだ。其苦勞の仕甲斐も無い、勝手な事を仕て居て、えゝ、憎しい……、だから、實家からも、相手にされ無いのだ。乞食扱ひにされるのだ。あゝ、妾や幸彦に、欺されたのだ。口惜い、今迄は、誰人が何と忠告しようとも、幸彦を信じ、妾や苦勞をして居たのだ。それに、道樂もふつつり止めて、肩書の工學士を願

みて、あの御研究に耽るのを見ては、快心なすつたのを、妻は嬉しいと思つて、社會へ見かへしする氣で、苦勞して居たのに、あゝ、始めて、三原さんの言葉で、幸彦を知つた。之れから、稻毛へ行つて、思樣怨みを並べ、此方から縁を切つて遣らう。えゝッ、口惜いッ、怎麼して遣るか……と、途中で、慌てるやうに乗つた俵が、兩國の停車場へ來て、俵夫に呼ばれるまで、考へに耽つて居た。もう、涙も出ない、俵を、下りて、切符を買ひ、開札口から、列車へ乗つた小繁は、考へに考へを生じて怨みに恨む眼のみ睜つて、默言のまゝ、何時か、稻毛の停車場へ來て居た。急がせるやうに、停車場前から俵へ乗つて、幸彦の宿の前で下りた時には、胸が躍つて、鼓動がどきどき耳へ聞える。苦痛を押さへて、宿の戸を開け、

「若し、大葉は居ますか、それとも他へ、宿りにても参りましたか、妻ですが、一寸……」

宿には居まい、必度、華族の別荘へ宿り込むて居るのだらう。宿の者へ鎌語をか

けて、其返事次第、直ぐ華族の別荘へと、改まつたやうに、入口で聞く。

「へゝ〜、ぢや、奥様ですか、まあ、もう少し早いとね、残念な事をしましたね  
まあ……」

若い宿の女房が、氣の毒氣に言ふ。

「えつ、不在のですか、では、松林の別荘へても……」

「別荘へ、否、あの華族さんのでせう。まあ、唯今もその何ですよ。御嬢様がお出になつて居て、泣いて在らつしやるので、へゝ〜」

「えつ、華族とかの御嬢様が……」

「はい、大葉様は、坊ちゃんを連れて、お部屋へ手紙を置いたまゝ、夕方の汽車らしいので、何處へか参りましたので、へゝ……」

「シツ、幸彦……」

「まあお入りなさい、貴女にお手紙が在りますよ。」

「妾に手紙が……、」

狼狽した小繁は、宿の女房の案内で、幸彦の居た部屋へ入ると、竦むだやうに、立つてしまつた。

山村伯爵の令嬢辰子が、手紙を面へつけたまゝ、其處に泣き倒れて居たので、呀つと小繁は、立つたまゝ坐りかねた。

「若し、奥様、之れが貴女へのお手紙で」

「さう……、」

齒を噛むで、辰子の泣き倒れて居る姿を憎さうに睨みながら、封開くも遅しと手紙を披げ、眼に讀む中に、ほろ／＼と涙が滾れ出て、我れ知らず、身を投げ伏し、「え、知ら無かつた。爾うとは知らず、三原様の言葉を信じ、お父様の云ふのを怨むだが、やつぱり、皆から欺されたのだ。え、つ、貴郎、す濟ません。妾が悪かつたのでしたわよ、許してね、あゝ、」

涙の顔をあげて、偶然辰子と顔見合せ、濡れた面を見られじと、二人が横向で、胸の悲痛に咽鳴ぶ。

「若し、何方のお嬢様か知りませんが、貴女は、怎麼して此處へお在の御座います。幸彦と何か……」

「否、何も、別に……ありませんが、少し用事が御座いましたので、此方へお伺ひしますと、此御手紙……」

「何ですつて、手紙……」

取り急ぎ、一筆遣し置き候。頼みがたき人の世にては無く、己れの身の儚なき運命を作り候事の恥かしく、一先づ未知の地へ旅行仕り候て、作りし運命の開拓を仕り度く候間、折角友として得し御令嬢へ、あかね御別れまでに、斯くの如くに候。頓首。

と書いて在る。それを讀むだ小繁は、己れの手紙とを引きくらべて、言葉なく憎

然となつて、

……苦勞を増させ候事の小生が意氣地なさ、本日其許の父より、縁を切りくるとの其許の御心中、さこそと察し上げ候て……、一先づ此身を隠し候へば、總てへの義理もと存じ……、豫て話し置き候先妻の子を、天よりか地よりか、俵夫より連れ參られて……、子を杖となし候て、最早何事も……、さらば、戀しかりし妻の許へ、夫て在りし幸彦より。

復讀直す手紙へ、ほろ／＼と涙が落ちて、云ひ知れぬ苦思の胸を抱いて、わつと小繁は、耐らず泣き悶える。

「若し、奥様、お確り遊ばせ、妾が必度……」

「否々、もう／＼何も仰しやるな、幸彦は妾の夫です、もの、他人様の御世話には成りません……」

辰子が、慰め顔にいたはれば、それを避た小繁は、怨みがましく言うて、涙に濡

れた眼で睨む。

「貴女、妾が悪いので御座いますが、誤解を……」

「否、誤解は致しません、怨みもしません、何卒、貴女は歸つて下さい、お願いですから……」

幸彦に、思ひ寄せてやら知らねど、戀ふ人と見た辰子を、小繁の繁子は、其の言葉が耳へ入れ無い。

「怎麼も失禮致しました。」

「……………」

出て去く辰子の胸は、云ひ知れぬ苦悶が在つた。涙に思ひを寄せて、濱へは出たが、蟲の月に鳴く音を慕うて、よ／＼と砂濱へ身を投げて泣いた。解た怨みの悲しさ、小繁は、手紙を抱いたまゝ、幸彦の去りし影を追戀て、更けて去く夜を泣き悶えて居る。

義理

一 百も出せば諾と……

長火鉢を前にして、吾妻家の主人佐吉は、女房お仙の差し出す茶碗の茶で、咽喉を濕しながら、

「ねえ、爾うぢやない、私は悪い事を云ふのぢや無い、お前さんの爲めを思ひ、自家の營業を考へるから、厭味のやうに聞えるが、決して厭味を並べるのぢや無い悪く聞か無いてね、考へて貰ひ度い。」

煙草を一服吸つて、凝乎天井を仰いで、涙に俯むいて居る小繁に、藝妓の道を話して居る。

「そりや妾だとして、木や石で出来て居る體ぢや無し、義理や何かは知つて居ます。けれど、御存じの通り、夫の在る身で、娼妓ぢや無し、莫迦な真似はしたか有りませ

せん、假令何と云はれましても、そればかりは、有りが度う御座いますが、其御親切には……」

「ぢや、聞かれ無いと云ふのかね。」

「はう。」

「小繁、能く物の道理を考へて御覽、樂みに稼ぐのも、夫の爲めでは有らうが、其頼る夫が行衛不明ぢや無いか、行衛不明の夫を待つよりは、年を老ら無い中に、身を定めてしまつた方が、お前さんの爲めでも在り、出世でもあるだらうぢや無いか。また家だつて爾うだ、高い金出して抱へた、お前さんがお茶ばかり挽て居られぢや稼業が立つて行かれ無いからね。死ぬか、生るかの境を救はれた事を考へれば、自家の事も考へて貰ひ度いからね、お前さんひとりの爲めに、家が曲つて終つちやあ世間へ顔出しが出来ないぢや無いか、そりや、貞女だと、お前さんは賞められやうが、生て行かなきゃなら無い家なのだからね、薄情なやうだが、營業して税を拂つ



て居るのだし、慈善家ぢや無し、其處をね……」  
 「眞實だよ、旦那の云ふ通り。妾が斯うやつて、旦那の御世話になつて居ても、お前さんを養ふの御世話になつてるのぢやないからね、少しは自家の爲めも考へておくれな。」

亭主の言葉に従いて、女のお仙も、憎いと云ふやうな面を遊めて、小繁を睨む眼を光らせて云ふ。

「はい、それは、能く解つて居ますが、大井子爵や、彼の三原と云ふ人の世話には成り度くありませんし、また、夫の行衛が知れ無いからつて、一端たてた操は、破れませんか、之ればかりは……」

「ぢや何かい、大井の子爵や、三原さんて無きや、たてた操を何しても宜いと云ふのかへ……」

「否、假令如何な人にも、之ればかりは許して……」

「莫迦だね、もう直き秋の更衣りぢや無いか、春拵へたものを、秋に直すやうな、各な藝妓ぢや、幅がきか無いぜ、大井の子爵が、五百圓出してもと云ふと、三原の旦那は、千圓出さうと云ふのぢや無いか、之れ程思ふ旦那は、何處探したつて、有りや仕無よ。能く考へて御覧な、他の藝妓衆に、五百の千のと出さなくとも、百も出せば、諾と聞くぢや無いか、藝妓冥利を知らぬのも、程があるぢや無いか。」

「そりやもう御親切は、ようく解つては居ますが、之ればかりは、金や義理で自由にされて足まりません、何と仰しやつても、厭で御座います。」

「好い加減にしる、優しくすれば増けあがり、餘り俺を莫迦にするな、おい、甘くすると承知仕無ぞ。」

「まあお待ちなさいつたら、お前さんは直ぐ気が短かいから困るよ。ねえ小繁ぢやん、さうお前さんが情をたてるのを、行衛知れ無くなつた。お前さんの夫が聞いたら、什麼に喜ぶか知れや仕無い、妾や羨ましいと思つて居るよ。けれどね、道は道、

稼業の裏は裏で在るのだから、恰度、お前さんを棄て去くやうな夫なのだから、其處を何してね、宜し知れた處で、先夫が悪いのだもの、返す言葉が無いだらうぢや無いか、知れないで居られりや、お前さんの徳なのだから、御世話になつたら怎麼だい。」

「……………」

「ねえ、爾うおし、彼方へも、此方へもと云ふのぢや無し、大井の子爵か、三原の旦那か、何方でも一人と定めて置きや、知れや仕無いぢやないか、内密にするのにほ、ほ、ねえ、爾うだらう。もう直き更衣だし、此處で一つ、他の藝妓等へ見返しをする氣でね、うんと氣張つた眞衣を拵へたら怎麼だえ、今日あたり、三越か白木屋が来る時分だからね。」

「……………」

「爾うく、お前さん指輪を欲しがつてたつけ、天賞堂へ誂へたら宜いだらう。妾

電話かけてあげやうか。」

「あれ女將、妾、もう何も欲しく在りません。何卒其話だけは、止めて下さいまし、お願いですから……………」

「ぢや、之れ程云うてもかい。」

「はい、御親切は嬉しいんですが、怎麼しても、夫の在る以上は、聞く事は出来ません……………」

「おい小繁、何だつて、黙言てりや、夫が在る。聞いた風な事を云ふな、おい、お前が女房だと、ちやんと籍でも入つて居るのかい、冗談ぢや無え、籍を抜いて、此藝妓に成つたのぢや無いか、よしあつたつて、それが、何になるんだい、頼みにも成ら無え夫を騒ぎやがつて、貞女ぶつた顔する無い、さあ、文句云ふなら、借金返して貰ふか、借金返した上で、勝手な誤澤を並べるが善いや、人面白くも無え。」

「眞實だね、爲め思へばこそ、種々云うてやるんだ。それを何だい、宜い加減にし

ないと、お前さんの爲めにならないよ……と云へば、それ迄だがね、何とか考へ直したら、怎麼だえ、妾の胸にあるからね、何に行衛知れ無い、御亭主が出て来たつて、妾がお前さんの味方に成つてね、操を守つてたつて之れ位の狂言はしてあげるよ。それに男だもの、直き泣きでもして見せりや、ほ、ほ、案外弱いものだよ。ね、其中にや、何方かの旦那と何すりや、成る程と情も出らあね、其處で、また、彼の御亭主の事も忘れて来るだらう。忘れまいとした處で、それは夫婦で居る中だけだよ、離れて他の旦那のお世話に成りや、情も移つて、反つて、別れた亭主の意氣地無しや何かが見えてね、愛想が盡きてくるよ。ね、妾に任せておくれな、悪いやうには仕無いから……、』

『否、御親切は、嬉しいんですが、怎麼あつても、之ればかりは、許して下さいましね、お願いだから……、』

顔見合せた。佐吉にお仙は、手にした煙管を投げ出して、衝つと、横を向て、鼻

をならして、冷やかに笑ふ。

『ねえ、旦那、お願いですから、それは止めて下さいな、妾之れから一生懸命になつて、各方のお茶屋さんへ行き、招して貰ふやうに、頼むて来ますから、何卒此儘にして置いて下さいな。』

『勝手にあしよ、』

『否、勝手にや出来無え、おい小繁ッ、自家や少し困つて来たんだから、借金を何とかして貰へまいか、住み替へてもするとしてね、』

『はい、怎麼も致かたが有りません。お願いしてもお聞き入れが無ければ、お言葉通りにして、住み替ませう。けれど、必度、一日も早く借金を何とかするやうにしますから、さう仰しやらずにね、折角此れまで、賣り込んだんですから。』

『出来無えよ。住み替へして貰ふのだ。へん、お氣の毒だが、他の家で、お前を抱へる家は、まあ有るめえぜ、行つた處で、吉原か洲崎だ。』

「えつ、何ですつて、」

「當然えよ、自家に居られ無えものを、他て抱かへる家があるけえ、宜い加減にし  
ろッ」

「眞實だよ。此稼業で賣つて居る。吾妻家から一言何すればね、ほい、まあ旦那の  
云ふ通りだらうさ。」

「……………」

「だからね、妾の言ふ通りにしてさ、ね、悪いやうには仕無いから、任せたら宜い  
ぢや無いか。」

「もう止せつたら、借金を早くして貰ふのだ、俺あ困つてるんだからよ。つべこべ  
云ふなつたら、風邪を引かあな、莫迦々々しいお神樂だと思つてやがら。」

「お前さんは、直ぐそれだから困るよ。可哀想ぢや無いか、ねえ小繁ぢやん、妾に  
任せるだらうね。」

「でも、そればかりは……………」

「否なのかい、ては借金の方は……………」

「え……………」

わつと、泣き伏した小繁は、身も世も無い、悲哀な苦痛に胸も裂る思ひして、去  
きし夫戀しと、悶え哭き、頭髪を掻きむしつて、伏した壘へ喰ひつき、體を慄はせ  
て、浮薄な世を呪ふやうに泣き沈むだ。

夫の爲めと、我れから藝が身を救けて、藝妓になつたのも、意氣地からては在つ  
たが、心の紐は解けぬ操を守つて、病夫を養つたのも、此借金故に、解かねば成ら  
ぬ義理と金故に、總てが踏み躪られるのかと思へば、先から先を苦しませる、神や  
佛が怨めしい。

「ほい、泣かなくつても宜いやね、妾の胸にあるんだからね、ほら御覽な、解ら無  
い小繁ぢや無いよ。」

夫婦は、意味有り氣な笑みを交して、慌てたやうに、小繁の泣き悲しむのを、慰め出して、神棚へ切火をあげ、拍手をうつて、再度び、小繁の泣き悲しむ態度を眺めて、己が言葉の力を誇氣に、お仙は莞爾微笑むて、亭主の佐吉を顧りみた。

同 二 思 惑 と

築山の亭から、江戸幕府時代を偲ぶ、市ヶ谷見附一帯の土手の老松を眺めた、大井子爵邸の庭へ、繁子の親萬兵衛と吾妻家の主人佐吉は、恐るゝ案内されて、亭へ置かれた榻へ腰を下ろし、悠然と煙草を喫つて居た、大井子爵の前へ来る。  
 「やあ、萬兵衛さんか、怎麼した、久しく見えんぢやつたが、良い金儲でも在つたかな、はッはッ、」  
 「否、へえ、金儲なんて、私のやうな貧乏人にや向きやせんで、へい、實は何てが

す。今日伺ひやしたのは、其へい、娘が世話になつて居りやす、吾妻家の主人が参りやして、直々御前様へ御目にかゝりやして、少々申し上げ度えとな、へい、それで……、」  
 「何、お前の娘が世話になつてる、吾妻家の主人が會ひ度いとかで、うむ、爾うか、何の用かね。」  
 「へい、その何で御座います。若し御主人、お前さんから話しなすつて下さいましな、私からぢや……」  
 「爾うですか、おや私が子爵様へ、へえ、お初にお目通り致しますが、私は吾妻家のへい、佐吉と申します者で、至つてその何でして、實は、何で御座います。小繁で御座いますが、怎麼で御座いませう、私が参りますのは何で御座いましたか、一何方かで御呼び下さいますやうにな、女房からは是非願ひしてと、斯う申されましてな。へッへッ、女房がもう飲みこんで居りやすから、決してお恥はかゝせやせ

「なので、へい、怎麼で御座いやせう。」

「何、小繁を、うむ、爾うか、宜しく。」

「え、御聞き濟下さいますので、いや誠に有りが度う存じます、それで私も助かりましたので、何しろ御存じの不景氣だものでげすからな、へい、」

「はッはッ、爾うか、お前さん達でも、不景氣は在るのかね、はッはッ、私は無いと思つて居つたが……」

「御冗談で御座いませう。我々稼業のは、實に酷いので御座いましてな、お話し以上で御座います。」

「爾うかな、まあ緩らして居るが宜い、何か馳走でも仕様かな、はッはッ、萬兵衛さん、貴方も御苦勞ぢやつたな、併し大丈夫かな、又例の手ぢやあ……」

「否、飛んでも無い、此度は大丈夫なので……」

「はッはッ、爾うか、兎に角、皆に骨を折らしたよ。」

と、呼鈴を鳴らして、本家から小間使ひを呼びだ。大井子爵は、團扇の風を、胸へ入れて居る。

黄ばんだ、葉櫻の並木を抜けて、江頭家の玄關へ訪うた、吾妻家の女房お仙は、亭主佐吉を大井子爵邸へ遣り、己れは三原を尋ねる可く、江頭家へ俵をつけた。

案内されて、三原の假室へ通され、改たまつた暑さの挨拶も即忽に、もう禮儀の無い、親しげに話し合ふ。

「ほ、ほ、何時もお羨やましいのね。」

「はッはッ、何が羨やましい。」

「何がつて、不景氣知らずなお顔して居らつしやるのが、眞實に、憎らしい程羨やましいのですよ。」

「はッはッ、甘い事を言ふぞ。其下から、妾が若かつたらぢやらうが、はッはッ、怎麼ぢや……」

「あら、お口の甘い事……」

「其處で、今夜あたり是非に……と、迎ひか……」

「まあ、お手の筋だわね、けれど、そりや待合さんか、お料理店さんでせうが、妾の藝妓家ぢや……ほ、ほ、」

「現代式とても云ふのは、何屋ぢやからつて、はッはッ、」

「まあ、お口のお悪いこと……」

「お前に仕込まれてな。」

「あれですもの、若藝妓の迷ふのも、無理は有りませんわ、ほ、ほ、眞實に、憎らしいやうな……」

「何ぢや、」

「可愛い……と云ふのですよ、ほ、ほ、」

「此奴が、はッはッ、時に、迎へに來たんぢやらうが、今日は駄目ぢや、否、當分

駄目ぢやよ。其替りな……」

「あれ、不可せんよ。駄目だなんて、他へ泳ぎ出して居らつしやるのを、妾やよく知つてますわ。」

「否、那麼事は無い、少し多忙しくなりよつたのでな。」

「それこそ駄目ですよ。可哀想だわ……」

「何が、可哀想なんぢや、」

「何がつて、小繁ぢやんがですよ。自家の……」

「はッは、は、は、莫迦云へ、彼の小繁は、我輩の手にや駄目ぢや、手に乗らんよ、はッはッ、」

「ほ、ほ、嘘仰しやい、もう出來てる癖に……」

「ば、莫迦云ふぢや不可よ、那麼事有るものか、」

「それはまあ、それとしてね、三原様、怎麼でせう。今夜邊り、小繁を呼びて下さ

「いませんか……」

「小繁を……、今夜……」

「えい、妾の胸に在るんですが……、」

「むい、お前の胸に……、」

「えい……、」

思はず進む膝へ手をかけて、眼を疑ふやうに、ばちつかせ、口を一文字に結んで、眼鏡越しに、睨み見る。急がしく扇子を使つて、胸をあふいて居たお仙は、四邊を見廻して、聲を忍秘ませ、言葉を續ける。

「眞實なんですすから、ね、是非……、そりや胸に、ちやんとほいほい、ね、御安心なすつて……、ぜひと……、」

「むい……、」

「少しはね、不景氣を助けて下さいな、弱つちやつてるんですすから、ね、旦那が來

てくださりや……」

「甘い事言ふちや不可んよ。我輩は直ぐ眞實にするからな、罪を作るなら、他の客にして貫はんぢや……」

「否、飛んでも無い、嘘欺なんて、眞實なんですすから、伺がひましたんで、嘘に參られますか、ほい、」

「むい、成る程な、ぢや何か、小繁が我輩の……、」

「我輩のぢや有りませんよ。是非お世話に成り度いんですつてさ。確り聞いて下さいな。」

「むい、」

「てね、是非今夜あたり……。怎麼でせう……、」

「うむ、行く、行くぞ。」

「えい、あの眞實……、まあ、嬉しい事、それで自家も景氣が直ると云ふ譯なので



すわよ、ほ、ほ、」

「ぢや、實際に於てぢやらうな。」

「あれ、繰言いぢや有りませんか、妾の胸一つですよ。」

「む、宜し、行く。」

「……て失禮で御座いますが、例の物……、大丈夫でせうか、あれ、那麼お顔して罪ですよ。」

「例の物ちうて、そりや何ぢや……、」

「例のつて、お金……、」

「金か、うむ、宜し、何程ぢやつたつけな。」

「お忘れなんですか、過日、仰しやつたぢや在りませんか、一箱や、二箱つて、お忘れはひどいですわ。」

「む、あれか、成功金か、うむ宜しく。ぢやが、千圓ぢや在るまいな、五百ぐ

らゐぢやらう。」

「え、結構ですわ、其半分だつて……、」

「よし、承知した。ぢや之れから直ぐ行く。」

「えつ、あの今から……、」

「うむ、まだ早いか。」

「否、早い處ですか、結構ですわ」

「ぢや行く、まあ待て、一緒に行かう。電話でタクシーを呼び、自動車と言ふからな、緩りしたが好い。」

「まあ、濟ませぬね、けれど旦那、妾一寸用事がありますから、一足お先へ失禮しませう。」

「何、一足先さへ……、」

「はあ、いろくね、ほ、ほ、手都合もありますもの。」

「爾うか、ぢや止めん。ぢやが、小繁の件は、大丈夫ぢやらうな、一杯喰はしよると、承知せんど。」

「ほ、ほ、まあ野暮な、大丈夫ですよ。」

「うむ、諾し、ぢや頼むだぞ。」

「はい、畏まりました。では御免下さい。」

「うむ、之りや少しぢやが、俣夫へ遣つてくれ。」

「へい、まあ一圓、俣夫へ、御祝儀ですな。」

「うむ、祝儀のやうなものぢやよ。」

「て俣代は……、」

「俣代……、」

「え、成功とかを、お知らせに來た妻の俣代位、ほ、ほ、まあ冗談ですわ、否、入ら無いので……、」

「うむ、爾うぢやつた。ぢや其方の一圓を返してくれ。」

「之れを、」

「それ、五圓ぢや。」

「まあ五圓、濟ません、ては頂戴します。ほ、ほ、御催促したやうなものね、ほ、ほ、有りが度う存じます。」

「ぢや、確と頼んだぞ。」

「はい、」

玄關へ送り出されて、柳橋の自家へ歸つたお仙は、恰度へ戻つて來た亭主の佐吉と、出會がしらに莞爾して、眼でもの言せ、冷やかに笑つた。送くり出した三原は嬉しさうな笑を満面に浮せて、電話室へ入る。牛込の大井子爵は、悠然した所に、或る誇りを表して、小間使へ手拭持たせ、湯殿へ出かける。

同三 物質と靈肉

見るから暑さうな、繁茂た葉の無果實を、窓の横に眺めて、松の木の間越に、隣邸から通る、洋琴の音が、呷つと絶ると、弾爪を押へて、もの憂はしげに、凝乎沈むだ、山村伯爵の令嬢辰子は、一と月ばかり前に、稻毛の別荘から、此本邸へ戻つて、家政と、佛蘭西語とを、家庭教師に就いて教授さるゝ他は、好な彈琴に、思ひの有無を慰さめて居る。

肋膜炎の苦は、稻毛の別荘へ轉地して、忘るゝやうに癒たが、忘れて消ぬ戀の苦を抱いて、悲い思を想ひながら、目的なく仰ぐ空を熟視ては、絶ず物と嘆息を吐く身の上になつた。何故自分は、華族の家へ生れて來たらう。自由を壓へられて、廣い天地を、小さく、且つ、女と云ふ道を歩むてゆく狭い名のもとに動いて居ねば、

成らぬのを考へると、同じ名の女でも、肩書の無い、下級な家の娘か、地方の農夫の女が羨ましい。廣い空を、充分に歩むてゆかれるだけでさへ、如何に樂からう。あゝ、戀の苦は知れど、斯うも胸を痛ませるものか、一層肋膜炎の爲めに、此世から死んで去き度い。否、死んでは、戀しい幸彦……に逢へ無い。

横戀慕と、憎み、笑はゞ笑へ、戀に制裁ありとも、束縛は無い。自由に戀は動けるのだ。假令妻ありとも、萌芽そめた想ひは、押へられるもので無い。愛の御神の戯れにせよ。戀を幸彦に通はせたも、或る力にひきつけられたので、汚れた思ひをするのぢや無い、夫として、仕らるゝやうに、神が此苦痛を與へて、妾をお試なさるのだ。横戀慕ぢや無い、眞誠の直な、美しい戀だ。必度此の戀に依る、愛の勝利者と成る。總ての困難を排しても、幸彦を夫として、家庭をつくり、愛の温かい夫婦と成らねば、戀の力が自分に無いのだ。恐怖す可く、又樂しい戀にとられた、辰子は、琴の彈爪を指から放して、寂しい面へ、薄く紅が浮て、力の無い微笑をし

た。

「辰子や、お前何を考へてるのかへ、怎麼かおしかね。」

縁にかけられた、伊豫簾を巻きあげながら、日さしを眺めて、後を顧みたる母の松子は、心配しげな、態度をする。慌るやうに、居座を直した辰子は、慈愛を含むだ母を仰いて、思はず涙ぐまれ、

「否、何とも……」

「爾うかい、夫れなら可いが、復病氣にても成つたのでは無いかい、博士を呼びませうか……」

「あれ母様、もうお医者様は不要のよ、御心配遊ばさないでも、丈夫になりましたわ、済みません……」

「夫れなら母様も、別に心配しないがね、」

と座敷へ坐つた夫人は、昵乎、辰子をながめて、其處に在つた團扇を手にとり、

微笑みながら、

「ねえ、辰子、少し御相談したいのですがね、怎麼てせう……、お前お嫁に行か無いかえ、是非と云ふ人が在るのですがね、もう娘ぢや無し、赤ちやんを持つても可い頃なのですからね、ほ、ほ、先方は、實業家で、見込の在る人で、爵位こそ無いが、若いには珍らしい人なのです。お前が、能く云つて居ましたつけね、華族は嫌だつて、ほ、ほ、お前の好きな實業家なの……」

「……………」

「過日新聞に、馬賊のやうな、大金儲をしたとかで、其腕の御立派なのを賞めて在つた、三原何さんとか云ふ、彼の江頭様の御宅にお出での方なの……」

「仲大路男爵から、是非につてね、お話が在るのですが、お前の望むて居る、願うても無い方なのだが……」

「……………」

「ほ、ほ、母様ばかり好つても、お前がお氣に入らなけりや仕方が無いが、お立派の方ですからね。」

「……………」

「ほ、ほ、まあ、母様としたことが、可哀想に、突然にね、頭からお話して、ほ、ほ、お前氣にしては不可せんよ、餘り好いお話なのでね、お前を喜ばせやうと思つたからなのよ、怎麼……………」

「……………」

「ほ、返事を聞く母様が悪かつたわね、けれど、遂ひ子の前途を考へると、嬉しい時は直にね。」

「母様、濟ませんが、其お話は止め下さいませ。」

「ほ、ほ、お嫁に行くのがお嫌なの……………」

「は、は、」

「え、ほ、ほ、まだお前は娘の氣で居るのね、お父様も、此事をお喜びで、是非貰つて呉れつて、仲大路男爵へ仰しやつてだが、お前能く考へて御覽よ。親は、子の前途を思へばこそ、爲めになるやうに心配するんですよ、能くね、お父様や母様の心を察してね、解つたかい、仲大路男爵へお返事仕なさや成ら無いから、お前怎麼だらう。強てとは云は無いが、良縁だと思ふから……………」

「……………」

「お前のお氣に入らなければ、致方が無いが……………」

「母様、氣に入りますも、入りませんが、妾、お嫁には参りません、否、嫁ませんの、斯うして、御両親や、兄様の御世話になりますの……………」

「な何ですね、まるで娘……………おや、泣いて……………お前怎麼かおしかえ、母様が、無理にでもと思つて……………」

「あれ飛んでも無い、決してお怨みなんぞと、勿體ない、何卒お許し下さいまし、

妾が悪いので御座います。お許し遊ばして……、」  
 「爾うかえ、夫れなら可いが、ては體でも……、」  
 「否、體は何とも在りませんが、母様……、」  
 「何てすね……、」

「……………」

「ほ、何が悲いの、何てお泣きなの、まあ、怎麼かしなすつたの、え、辰子、これ、何が……、」

「母様……、」

「はあ、」

「妾……、嫁ません。お許し遊ばして、」

「何處へ、」

「お嫁には……、妾、お許し遊ばして……ね、」

ほろ／＼と涙に噎むで、辰子はよ／＼と母の膝へ泣き伏す。呆然な顔した母夫人は泣きぢやくる辰子の脊を撫て、未だ娘……と云ふやうな、態度をして、可愛氣な耐らない情を通はせ、

「まあ、お泣きてない、娘ぢや無し、恐い事は有りやしませんやね、お嫁にゆき度くなけりや、嫁なくつても可いのだから、お泣きなさるな、見恥無い……、」

「え、ては……、嫁させなくても……妾……、嬉しいわ、母様、何日までも、お傍へお置遊ばしてね……、」

「はい、何日までも在つしやい。」

「えつ、妾、其方が……、」

「其替り、母様が、何日までも、お前ひとりの爲め、苦勞をしなければ成りませんからね、何日までも在つしやい、お前さへ可ければ……、」  
 「えつ、母様が御苦勞を……、」

眼を睜つた辰子は、母を昵乎仰いて、怪訝な態度をする。母夫人は、顔を横向て  
吻と小さい嘆息を吐く。

「何です、お前さへ苦勞や、心配さへ無ければ、母様はそれで可いのよ。ね、解  
つたらうね。」

「妾、何ですか解りませんが、母様をお苦しめするなどと、怎麼心は御座いませ  
んのです……、」

「だからさ、何日までも、母様の傍に居るやうに、澤山我儘なさい、ね、お父様も  
嘸ぞお喜びてせう。」

「お父様が……、」

「えッ、お前が、お嫁にゆかないで、何日までも我儘して居たら、嘸ぞお父様が、  
お喜びてね、御苦勞もなさるまい、折角良縁先方なのに、それを断つて、母様と一  
緒に在なさるのですから、親孝行と云ふのでせう。親は、子の身の先を定めて遣り

立派にたて、貫つてこそ、孝行とも思ひますが、親の言ふ事も聞か無いて、何日ま  
でも母様と、一緒に在ると云ふのだから、母様も嬉しいし、また、他様の嬢様が、  
何處其處へお嫁になり、赤ちゃんがお生れなすつたと聞く度に、什麼に嬉しい  
せうね、お前が傍に何日までも在るのだから……、」

「母様……、」

「おや、復たお泣きかえ、お前にも困るね、お父様が、無理にも、三原様とかへお  
嫁に成らうとしたのは、何かお考へがあるからよ。」

泣き伏した、辰子の思惑よりは、母の辰子を覗き込む心の中には、人知れぬ苦に  
悩むらしい。縁側を、軽く踏むて來た、小間使のおたけは、敷居際で畏まり、

「若し、奥様、伯爵様が、お呼びで御座います。」

「はあ、おや爾うかえ、今伺がひますからつてね、之れ辰子や、てはね、能くお考  
へなさいよ。」

斯う云つて、立ちあがつた母の夫人は、小間使の後から、西洋館の方へ急がしげに去く。ワツと、泣き聲たてかけた辰子は、袖を口に噛みしめて、よゝと嗚咽して苦痛ない情を泣き悶えた。

西洋館の扉を開けて、伯爵の居間へ足を軽く入れた夫人は、不圖仲大踏男爵の姿を眺めて、愕然したかのやうに、體を竦めて、眉を寄せながら挨拶をした。

「若し、怎麼て御座いませう。嬢様の件は、甚だ再三で失禮ですが、先方で急し、且つは、會社の浮沈にかゝりますすてな、それに、伯爵殿も、私も爵位があるし、貴族院の一員で在る以上は、會社問題が大なる原因となり、ひいては、一家の……ですから、實は、心痛して居る次第なのです。」

「御尤で、若し卿、怎麼したもので御座いませう。」

「私もな、實は心痛して居るぢやが、まさか、嬢を犠牲にするなどは、私の心として面白くない。と云つて、會社の浮沈が一家の汚名となり、社會の物議が、怨望を

受け、且つは、身の置き處も無い事となれば、先祖へも申分がならず、いやもう自分ながら、此會社問題には、氣を腐敗せちまいましたぞ。」

「妾も、何とかしてとまで思ひまして、種々考へましたが、良い思案も有りませんので、憎まられたり、怨まれるのを承知で、嬢へ話しましたが、怎麼したのですか、泣いてばかり居て、困つてしまひました。」

「うむ、可哀想ぢやてな……、」

「では、先方へ破談ですか……、」

巻煙草を手にして、昵乎熟視る仲大路の視線を、避るやうに横向た眼を、夫人と見合せ、悲痛しい眉を寄せて、吻乎息をかすかに吐く。伯爵は、東京商船合資會社の社長で、創立以來非常な苦辛の末、資本五千萬圓の隆盛なる今日の會社にした。それに、歐洲戦亂の期に際して、數倍の利益を得たが、不幸、獨逸の潜航艇の犠牲を拂ひ、歐洲航路の汽船を、三艘沈没させ、二艘抑留されて終つた。其損害に見る



見る資本の半額をけづられ、預金せし銀行は、破綻し、哀れ、日本に於ける商船王とまで呼ばれた、社長山村伯爵は、夢に耽つた乞食のそののやうに成らねばならぬ極端に際つた。

處が、合資の一人者である、仲小路男爵が、支那の鑛山王と呼ばれた、三原甚助の歸京を知り、以前の師弟の關係を利用して弟子、書生で在つた、三原を説いて、出資させようと計つた。併し、物質外に、何等情を解し無い三原は、書生時代から華族に對する野心、自己が信州の水呑百姓で、新平民の子に生れたのを非常に嘆いて、其肩書の族籍を覆ふと云ふのと、新平民の子が、名門の華族の娘姫を、妻に迎へて、其誇りを社會へと云ふ考へが、出京の時から、其腦裡に秘じて居た。そして妻に貰ふなら、山村伯爵の令嬢辰子をと、人知れず思つて居たが、益ないのを早くも知つて、遠く支那内地へ旅行した。それが、二三年ならずして、巨萬の富を貯はへ、社會の耳目を驚嘆させて、悠々上京したのが、山村伯爵家へ對する野心の機

會を作り得たのだ。

爾して、師であり、主人であつた、仲大路男爵の出資を聞いて、機乗ず可しと、野心の笑を洩して、始めて物質に於ける、其意を表し、慾望の牙を見せて、交換問題を開き、物質以外には、何もの情も無い行爲を見せて、冷やかな笑みをかたひけた。己れ憎い、恩知らずめがと、腹を怒らせ、憤然と爲つた仲大路男爵も、目下の窮乏には、胸を撫でて、三原の意を諄とした。

「噫々、親の心子知らずぢや。」

歎息を、強く吐いた山村伯爵は、夫人を見る眼に涙が浮んで、ホロリと落した夫人は、俯むいたまゝ言葉が無い。暗然となつて、秘かに齒を噛んだ仲大路男爵は、眼を眠つて、深い沈黙に落ちた。

斷腸ない情に泣いた辰子は、何思つたか、偶乎起ちあがつて、出さじと涙の顔を拭ひ、襟衣を直し、亂れた頭髮を搔きあげ、秘乎足を忍ばせて、長い廊下を西洋館

の入口扉の傍へ佗立んだが、音たてじと扉を開けて、伯爵の居る室の扉へ耳をつけると、「呀ッ」と中の様子に驚くよりは、物質に於ける犠牲云々が、強く辰子の胸を痛めた。

「まあ、父様も母様も、妾を犠牲にして、靈肉の尊いのを汚さうなどと、なんと云ふ……、」

怨じ顔に、見えぬ扉から中を仰いて、ホロリと身の不幸を顧みて、涙を悲とて落した。

伯爵の思惑よりは、辰子のそれが痛切に、體を戦慄させるくらゐ、怨みに泣いた苦勞を社會にまた求めも得も仕無い身には、尊い靈肉の生を汚されるのが、什麼に悲惨で、且つ苦痛を胸に感じたらう。泣き聲出さじと、袖に唇口を押へて、慌て西洋館を出た辰子は、廊下に俄場と身を投げ伏して、よゝと絶いるやうに、身をもがいて泣き悲しんだが、壓來る涙の眼をおさへて、踉蹌と、踏みしめる力の無い足歩

で、玄關の方へ、四邊を忍んで、泣き歎歎ながら去く。

夕立ち

一 賤しい藝妓風情

凭側へ、附をもたせて、雪江の畫いた浮世繪の美人の掛抽のかゝつた、床を後にして、餘程飲んだらしい顔の紅く染た、大井子爵は、鈍濁とした眼を細くして、座を身廻しながら、ひとり微笑んで居る。

大川へ面した、縁側へ立つて、片手を襟から懷中へ入れた小繁は、蒼白な顔して座敷の中の騒ぎを他に、深い思案にとらはれたか、身動きも仕無いが、時々柳月亭の店先き邊りへ氣を配つては、涙を眼へ浮べて居る。蹣跚と、座敷から出て來た、小繁の親の萬兵衛は、偶然小繁の姿を見るより、

「へッへッへッ、怎麼した。お繁、追がは俺の娘だ。能く親孝行をしてくれるな、

お蔭で俺も、福の神様へ、久しぶりてお目にかゝれるのだ。おい、怎麼でい、親を  
樂にして、氣もちが悪かあ有るめえ、へッへッ、」

「……………」

「へッへッ、泣くねえ、何て泣くんぞえ、嬉しいからつて、悲しい事が有るけえ、  
屁羅棒め、確りしろいつ、縁起でも無え、さあ中へ入えつたら……………」

「蒼蠅いつたら、何するんだよ。娘の體を賣つて、親は安樂に暮さうなんてさ、畜  
生より劣つて居る。妾や飛んだ親を持つた。あゝ、情ない親だねえ、他様の親娘を  
見る度びに、妾や羨やましくつてならない。」

「な何でえ、他人は人だ。俺はな、」

「おいこら、何を其處で誤駄々々してるのか、此方へ入つたら怎麼だ。親娘喧嘩な  
どして、」

「へい、申し理由が有りやせん、何ね、親を莫迦にしやすからね、一寸灸を据た處

で、へい、」

「お前さんの灸は効ないよ、はッはッ、」

「うむ、む、へッへッ、口の悪い溝口さんだ。やい、汝のお蔭で、飛んだ親へ恥か  
かせやがる。」

「恥ぢつて、ぢや、お父つ様、お前さん恥を知つて居なさるかえ、あの恥をさ、ほ  
ほい、」

「な、何を笑やがる。恥を知つてるから怒るのだ。」

「えッ、恥を知つてる。そりや頼しい、ては聞きますがね、可愛い娘が、行衛知れ  
ずになつた、夫を慕つて苦しんで居たら、娘の氣を慰め勵ますのが至當でせう。そ  
れが、無理に操を破らせて、娘の苦しむのを他に、左り團扇で暮さうなんて、よく  
人の道を歩けるね、それでも恥を知つてるの。其上ならず、お客と一緒に来てさ、  
目の前で、娘の苦しむの喜んで、よくお酒が飲めたり酔えますね、ほい、それで

も恥を自分でかいて居ないのかい、確りおしな、碌で無しにや生れや仕無いだらうね。」

「な何呷かしやがるんだ。此奴が、」

「之れ待たないか、何の真似だ。止せつたら、」

多少良心に注されたか、其非を隠さうが爲めに、振りなげた拳の腕を、後から無圖と押へた。長髪の溝口は、意味有り氣な笑ひを、小繁へ浴せて、莞爾する。

「は放しておくん無え、親を莫迦にする娘を、親が責監するのに、何故止めやがるんだ。放せつたら……」

「否、放さぬ。子爵からの御命令だ。」

「えつ、子爵様から、うむ、ぢや止めよう。やいつ、覺えて居やがれ、忘れるな、子爵様がお止めにならなさまや、叩き殺して遣るんだのに、態あ見やがれつ、」

「ほ、那婆に子爵様が有りが度いの……」

「當然よ、華族様だぞ。」

「ほ、華族が有りがたけりや、頼む神や佛も有りが度い譯さ、元は同じ人間ぢや無いか。」

「な何でえ、俺が斯うやつて、貧乏から出られやうとするのは、大井の子爵様のお蔭だぜ、冗談ぢや無え。」

「爾かえ、ぢや澤山可愛がつてお貰ひな、妾の體を……苦しめないで、立派に妾を生して下さいな。」

「な何でえ、」

「まあ、止せつたら、見ともない、おい小繁、中へ入つたら怎麼だ。うむ、爾うだ、もう宜い加減にお開きとして、おい丸子、小半、豆子、二次會としてな。」

「はあ、爾うしませう。一寸さ萬兵衛さん、此方へお出なさいな、あら小繁ちゃんお父様を借りるよ。」

「へい、喰はれ無いやうに、お注意なさいよ。」

「何ぬかしやがるんでえ。」

丸子は溝口の眼で語られた意味を、早速の無線電信、ぎうと萬兵衛の腕を抱へて座敷を始末に來た女中と、入れ違ひに縁へ出て、

「ぢや小繁ちゃん、後をね……」

「お頼みますよ。」

「御緩り……ほい、」

「ぢや子爵、お先へ、おいッ小半、何故我輩を置いて行き居る。まあ待たんか、やあ小繁君、頼むぞ。」

盤盃狼藉の中を、どやどやと立ち去つてゆく、一同の後姿を眺めて、ひとり残された小繁は、寂莫さがしみくと胸を襲うて、何知らず涙が出る。

「おい小繁、此方へ入らんか、もう自動車も來るぢやらうが、まあ此方へ來て、話

でもせんか。」

手もち無沙汰の大井子爵は、小繁を呼び寄せて、望んだ戀を、近く傍で眺めたかつた。

「はあ、」

腰を軽く下げた小繁は、何思つたか、座敷へすうつと入り、子爵の傍近く坐つて疊へ手を衝いた。

「はッはッ、何だ。改まつたやうに、」

「はい、子爵様、少し、折り入つてお願いが……」

「うむ、諾しく、何ぢや、聞いて遣らう。お前の事ぢやてな、乃公の命も不要ど、はッはッ、」

「否、命なんか、決して欲かありませんが、あの……妾を生すと思し召して、女の貞操を全ふさせて下下さいましな、助けると思し召して、」

「えつ、何ぢや、生せ……」  
 「はい、女の尤も大切な、貞操を、何卒此儘お置き下ださいまして、妾を立派……  
 否、汚れ無いやうに、操を全うさせて下さいまし、假令夫が今居りませんが、夫  
 婦は名とのみ云へ、夫へ盡す妾の操心を、何卒……、お願いです。生せて下さいま  
 し、操が殺されば、此總ずの體は、死んでしまはなければ成りません。同じ死ね  
 なら、今一度夫に逢ひ、妻だと呼ばれて、妾や夫の膝を枕に、死に度う御座います。  
 子爵様は、御酒のお加減で、お戯ひ遊ばすとは承知して居ますが、冗談から何とか  
 て、お肩書をお汚し遊ばしては成りませんし、ねえ、子爵様、何卒お願いして御座い  
 ます。」

涙に泣きながら、疊へ身を伏し悶えて、小繁は大井子爵へ哀れみを請て、死んで  
 ゆく操を、生せと悲しい血を吐くやうな、思ひをのべる聲噎んで、體を戦慄せて居  
 る。

「はッはッ、心配するな、命をとらうと云ふのぢや無し、私がお前を愛して遣れば  
 親が樂するんぢや無いか。何だ、貞操が怎麼したんか、莫迦な、今日貞操を云々す  
 る女があるか、況て、藝妓ぢや無いか、藝妓に貞操を強るのは、大莫迦者だ。まあ  
 心配せんで私に任せて置け、もう自働車も来るぢやらうから、森ヶ崎へても行つて  
 な、今夜温泉で體でも温めて、緩り宿まつて来るんぢやよ、はッはッまあ此方へ寄  
 れ、私や鬼ぢや無いぞ。」

膝を進ませて、疊へ手を突く小繁の手を執れば愕乎後へ退がつて、手を引き込め  
 た小繁は、涙に濡れた顔をあげ、怨めしうに子爵を眺め、

「あれ御冗談遊ばしぢや困ります。妾には夫が御座います。へい、華族様ですから  
 まさか賤しい藝妓風情に、御冗談は無いと存じまして、藝妓身でも、女の道を知つ  
 て居る、此妾へ、嘸ど御同情あるとばかり思つて居ましたが、まあ、何と云ふ惨酷  
 な華族様でせう。それで、尊い御名門なのでせうか、お情けに縫らうとして、之れ

程お願ひしても、怎麼してもお聞き入れ無いですか。」

「聞くも聞か無いも無い、お前の體は、もう私の物になつてるんぢや、没趣味ことを云ふものぢや無い、黙言つて、私の爲る通りに成れば、宜いものぢや無いか、貞操が何だ。藝妓で在りながら、野暮な事を云ふものぢや無い、此方へ來い。」

「あれ、何に手なんぞ出すんですよ、猫が鯉節を盗むのぢや無し、妙な手つきをなさるな、妾や女の道を歩く、之れでも人間ですよ、能く眼を開いて御覽なさいな、下から出りや増けあがり、華族様が聞いて呆氣らあ、冗談ぢや無い、他の不見轉や、大正藝妓なら知らぬ事、之れでも血と情とを持つた、藝妓にや違ひ無いが、夫が在つてさ、可愛い夫へ盡す誠心の操はね、やたらに汚すやうな、へん、汚される女ぢや無いんだよ。確りおしな、莫迦面してさ。お前さん見度いな華族がね、世襲華族で居るから、先祖が泣いたり、國の名を恥かしめるんだ。」

「な何だと……」

「何でも無いよ。面洗つて、女の操は何だと、奥様に聞いてお出でなさい。そうしたらね、妾が念入りに教へてあげるよ。ほ、お丹珍の癖にさ、よく妾が口説るね、冗談ぢや無い、莫迦くし。」

「え、ッ、黙言れッ、詐欺師め」

「何だつて、詐欺師だ。」

「詐欺師よ。親や抱主と共謀になり、能くも我輩を欺しをつたな。え、ッ、お、詐欺めッ、親を呼べ、抱へ主を呼んで來い。もう、承知は出來ん。」

「おい、大きな口を開きなさるな、妾が何日貴方を欺したよ。勝手に皆に欺されやがつて、お前さんが莫迦なんだよ、妾の知つた事ぢや無いや。」

「汝の知らぬ事かい、汝が第一の證據だ。」

「おい華族様、少し静になさいね、體面にかゝりませ。」

「え、ッ、黙言れッ、何だと……」

「何でも無いよ、戀のかなは無い怨恨を、犬の糞で仇きを打つんだらう。おい華族様、一寸此酒を失禮するよ、今迄飲んだ事の無い酒だが、もとから好なんだから、まあ御免下さいましよ。」

口惜さうに、體を慄はせて、今にも小繁の體へ飛びかゝりさうに、怒りに燃えた眼で睨んで、拳をかためて憤然とする大井子爵を横眼に眺めて、前にあつた酒を盃洗の水を庭へさぶりと開けて、並々と注ぎ、二た息吐たが、甘味さうに飲み干した小繁は、莞爾り笑つた眼の冷やかに見せて、唇の邊りを拭きながら、ふつと、酒の息を吐いて、ちろりと其處らを睨め廻した。

同 二 憤怒にもえた眼

「ねえ大井の子爵、御馳走酒と云ふのは、餘りお甘味無いものね、ほ、ほ、贅澤な

ことを云ひますが、之れも酔つて居るんですから、御免遊ばせ、へん、莫迦な顔なさら無いで、華族様らしい態度をなさいな。あ、好い氣持になつた。う、いッ、」

大井子爵は、何を思つたか、握つた拳を解いて、怒つた顔を柔らげ、くの字姿になつて、しどけ無く裾を亂し、眞白足へ、鴛鴦を畫いた縮緬の長襦袢をからませて片手を疊へ置た、小繁の傍へ恐々寄り、肩へ手をかけながら、機嫌をとる氣か、

「なあ小繁、私が悪かつたよ、許してくれ。はッはッ、お前酒が好ぢやつたのか、うむ、爾うか、さあ澤山飲め、私が酌をしてやらう、いくらでも酔へ、介抱ぐらゐ仕て遣るぞ。はッはッ、心配せんでな。」

「何しやがるんだい、猫撫で聲しやがつて、妾の肩へ手をかけやがる。此體はね、お氣の毒だが、夫より他の人には、障らせ無いんだよ。叱られらあ、甘味事言やつて、其口で大正は乗るだらうが、へん、妾や欺され無いんだよ、ほ、ほ、良い態度だ。其手でお釋迦のお尻でも撫てるが宜いや、御馳走酒を飲ませたからつて、妾



や其氣にや成れ無いよ。」

「はッはッ、まあ宜しい、さあ酌をしたぞ。」

「不要よ、酒の中へ眠り薬りても入れやがつて、自働車で妾を何處へ連れてゆくつもりだらう。どつこい其手は喰ひませんよ。華族面から癪に障らあ。」

「はッ／＼はッ、酔つたな、私が悪いんだ、さあ、家へ行かう、もう自働車も来たらしいから……」

「お止しッたら、妾の體へ障つちや厭だよ。叱られるぢやないか、可愛い夫に申し譯がありませんよ。」

「もう解つた。解つたから静にしる。」

「静かにしろつて云ふの、ほ／＼ほ、華族の飾りが恐くなつたのかい、態あ見やがれ、それ程體面が恐ろしかつたら、静かにさせるやうに、藝妓を直ぐ醜業婦だと見ないで、藝を有りが度く拜見しやがれ。」

「解つたと云ふに、没趣味こと云ふな。」

「解つたら、妾を此儘歸しておくれな、肩書と、金で妾を自由にしようとするからさ、冗談ぢや無い。」

「もう宜しく、解つた。」

「解つたつて、成る程道がは華族さんだ。ぢや之れで失禮しますよ。怎麼も有りが度う。あつ、久しぶりで、好い氣持ちに酔つちやつた。」

身を起した小繁は、帯の邊りを直して、亂れた髪を掻きあげ、冷やかな笑みを含んだ眼で、ぢろりと大井子爵を顧みながら、とんと後裾を踏んで、轟乎と立つ姿の凄艶な態度が、掛抽の繪から拔出たかのやうだ。

「おい小繁、お前は何處へゆくんだ。」

「え、妾……、知れてらあね、お暇間を貰やあ家へ歸つてね、可愛い夫の寫真だけでも見るんですよ。」

「何だと、」

「夫寫真でも抱いて寝るんてすよ。」

「待てッ、俺は暇間を遣らんど。」

「暇間を遣ら無い、冗談ぢや無いよ。假令賣り物買ひ物でも、妾の體は藝だけだ。肉まで賣つてたまるものか、大事な夫の體なんだよ。大きな口聞きやがると、咽喉ツ玉へ喰ひついて、此世の引導渡してあげるよ。妾や死んでも、心や體は汚さないんだよ。」

「ひッ、もう之れまでだ。よく恥を……」

「あれ、何するんだよ。放しておくれ、えつ、放さ無えか、放せつたら、え、口惜ッ……」

「あッ、あッ、痛いッ、えッ痛いッ……」

小繁の後から、双手をかけて、抱すくめながら止めた大井子爵は、腫が凄い程光

つて、充血した眼を怒らせ、其場へ引き戻さうとする手へ、ぐつツと噛みつかれたので、思はず放して、慌て手の甲の齒傷を押へ、憎さげに小繁を睨んで、痛さうに血を拭ふ。

「態や見やがれ、莫迦な真似しやがるからだ。汚らばしい、それ程此の體が欲けりや、妾の大事な夫へ斷つて、奥様を離別した上で、眼の穴へ兩手突つ込み、能く考へてから來やがれ。ほ、ほ、」

寂しい笑ひをたて、ほろりと身の上に、涙を滾した小繁は、耐らない胸の苦惱を壓へて、前歯で下唇を噛み締め、何やらひとり頷いて後をも見ずに、此離れ座敷の縁へ出る。其後から、再度大井子爵は、光らした眼だ野獸のやうな態度に變つて、躍り出すや無圖と抱かへて、座敷へ連れ入れようとする。

「あれッ、誰れか、冗談ぢや無い。お止しなさいつたら、厭ですよ。あれ、不可ませんたら、えつツ、何しやがるんだよッ、放せつたら、誰れか來てッ、」

「誰れが来るものか、もう此方の物だ。えッ、非常手段でも、な何と、生意氣な、もう……」

「厭だつたら、お止し……なさいッ、」

「えつッ、止せるか、あッ、あッ、痛いッ、ウワッ、」

地響がして、大井子爵の體は、小繁を抱へ押へた手が離れて、泉水近い敷石の傍へ、離座敷の縁から飛んで倒れた。身を跳いて立つた小繁は「呀ッ」と復逃げかゝる袖を押へられる。

「はッはッ、僕だ。我輩だ。逃るにやあたらん、恐ろしか無い、救ひに来たんだ。

心配するな。」

「まあ、三原さん。」

眼を睜つて、其處へ坐つてしまふ。

「もう安心しろ、我輩が救ひに来たんだ。華族ともある可き者が、憎い奴だ。否、

ありや華族ぢや無い、華族の名を欺る奴ぢや、さも無くば、此様事はせん。」

「あれ、眞實の華族さんなんですよ。」

「否、違ふ、華族なら、容易な事ぢや無い、こらッ、汝あ華族の名を欺る、詐欺師ぢやらう。我輩は、三原と云ふ、江頭の家に住る者ぢやが、返事に依れば、警察へ引き渡すぞ。莫迦ッ、身の程を知れッ」

「あッ、む、痛い、む……、小繁ッ、わ、忘れるな、」

痛む腰を揉つて、顔を歪めて立ちあがつた大井子爵は、三原の名を聞いて、齒を喰ひしめながら、憤怒に燃た眼に小繁を睨んで、四つ目垣に亂れた、萩を踏んで柴折戸を開け、口惜しげに出て去つた。

「はッはッはッ、莫迦め、悄然出て去きよるぞ、あれ見い、意氣地なしが、さあ小繁、我輩と一緒に座敷へ来るが可い、種々話もあるからなう、」

「はい、御親切は有りが度う存じますが、今夜は之れて御免下さい、何だか頭腦

が痛んで……」

「え、頭脳が痛い、夫りや困るな、うむ、我輩の處に、可良薬が在る。あれを呑んだら宜からう。」

「否、もう澤山です。妾……之れで……、」

「まあ可いと云ふたら、我輩の座敷へ來るが良か。」

「もう之れで……お願ひですから……」

「爾う云ふものぢや無い、男に恥を、さア、」

「あれ、お止しなさん。」

「何、止せ……」

小繁の手を執らうとして、振り放された三原は、其手を組んで、昵乎、眼を險しくむけて、口を一文字に結ぶ。

「はい、貴方はよく御存じてせう。藝妓こそ仕て居ますが、妾に夫のあることを、

それているく苦勞があるんでせう、ですから今の騒ぎで、すつかり頭脳が亂れちやつたのですもの、今夜は勘忍して……」

「む、爾うか、ては尙ほ更らだ。幸彦君と我輩とは友人だし、苦勞が在ると云ふなら、それを聞かして貰はふぢや無いか、ぢやからな、座敷へ來て、緩々話さう、又我輩も、大いに力にならぬでも無い、それに不思議と、斯う貴女を救ふのぢやからな、因縁があるのぢやらう、はッはッ、さあ……、」

「否、今夜だけは……、」

「む、」

「勘忍して下さい、ね、三原さん。」

「小繁、僕は、貴女を改めて招んだのぢやよ、我輩は客ぢやよ、え、二度まで助けて在るぞ。」

「……………」

「我輩は、友人の妻君と思へばこそ、救ひもし、優しくもするのぢや、それを何ぢや、失敬な、客となつて、我輩の意に従がはせるぞ。」

「……………」

「あゝ、早く來んか。」

俯瞰て居た小繁は、吻つと歎息を吐て、前の虎を追は、後からの狼犬、ほろりと涙にくれて、身を慄はせる。

「あゝ、怎麼した。早く來いと云ふに、夜も更けるぢやないか、困つた女ぢや、ては斯うして……………」

「あれ、腕を掴まなくつても、行き度けりや參りますよ。お止しなさいな、助けたいの、救つたのつて、友人の妻と知つてりや、義務としても當然だ。」

「何ッ、」

「爾うてせう。友人云々と云ふなら、何故過日、妾がお頼みにあがつたのに、幸彦

を莫迦にして、悪口言ふたんですよ。夫を悪く云つて、妾の氣を引き、無理にでも宿らせやうとしたんでせう。お氣の毒ですわね、汚れた情にほだされるやうな、此小繁では在りませんよ。何だい、友人だと鼻にかけやがつて、家の主人と共謀に成り、友人の妻と知つて自由にしようとする、汚ない根性を止めなさい。お前さんには常識が無いのかい、支那の女や、不見轉大正とは違ひますよ。ほ、ほ、お氣の毒でしたわね。」

「まゝ、いッ、恩知らずめ、薄情女ア、能くも恩人の我輩へ恥を與へよる。怎麼してくれよう、うぬッ」

踏む縁へ、足の力を入れ、腕を躍して憤然とした三原は、眉を寄せて、眼を怒らせて睨み、今にも打ちかゝらう態度を示す。神経症に返つたらしい小繁は、眼をつらせて、頬の筋肉をびり／＼と慄はせ、喰ひ締た唇から、たらく／＼と、冷たい血を洩し、破れた島田鬚をがつくりと仰むけ、

「な何ですつて、恩知らずだ。薄情だ。失禮な事仰しやるな、恩を着せて、妾を口説うとするのを断つたから、薄情なのですか、ほい、冗談ぢや無い、自由にし度い爲めに、恩を着せて、大事な女の操を破らうとする人が、情があるのかい、否さ、お前さんの方が薄情だらう。況さへ、友人の妻ぢや無いか。少しは、身の程も顧みるが可い……」

「えいッ、汝ッ、」

「あッ、痛い、痛いぢや無いか、何で殴るんです。さあ、殴るなら、澤山お殴りなさい、友人の妻を口説て、自由になら無いからつて、な、殴る人が友人てせうか、さあ、もつとお殴りなさい。」

「なにが、友人の妻だ。汝は藝妓ぢや無いか。買った藝妓が、客の我輩を莫迦にするから、殴るんだ。友人の妻と稱するなら、何故友人と夫婦に居無い、別れて藝妓になつてりや、客が冗談するのは當然だ。況てやだ。幸彦君とは、もう絶交して居

るんだ。大葉とも在る友人が、妻を藝妓にして、生て行かうとする。下劣な者は、我輩の友人ぢや無い、他人ぢや。」

「爾うですか、他人と仰しやいましたね、宜うござんす。さあお殴りなさい、妾や直ぐ警察へ行つて……」

「黙言れッ、勝手にしろッ」

と、横眼に睨んで、憤然と、足音荒く此場を立ち去る、三原の後姿に、小繁はわツと體を慄はし、縁の板敷にもがいて、泣き鳴咽して伏し倒れた。更けてゆく大川端の夜は、流るゝ瀬の石垣にさゞめいて、星が尾をながくひいて、西へ消えた。

同三 戀は自由です

何處を怎樣、歩いて來たか、裸足のまゝの小繁は、裾を短くはしよつて、眞白い

足にからむ長襦袢の亂れるのも直さず、急ぐ態度では在るが、悄然と俯向いて、隅田川の渡舟場、竹屋の棧橋の柵へもたれて、ヨ、と聲を忍んで泣き鳴咽んで居た。其柵を離れた。舟待合の縁臺に、親の苦痛を顧みず、己れの身の戀の惱みが、犠牲の聲を洩れ聞いて、怨むとも無く、親を恨んで、悲哀の胸を抱たまゝ、ふらくと邸を出た山村伯爵の令嬢辰子が、絶え入るやうに泣き倒れて居る。夏とは云へ、更けた夜は、四季とも同じ寂莫が、涙に悲痛を包んで、惱む胸を抱く二女には、それが殊更に、しみくゝと感じる。何故不幸な妻だらう。と顔をあげて、暗夜に黒染だ隅田川の瀬面を眺め、棧橋抗へ寄せて去く水の瀬波の、沙々と忍んだ音に、思はず引き入れられるやうに、恍惚となつて、昵乎熟視る眼から、復然と涙が、耐かぬる身の上の悲惨な世を悶えて、下へ落ちた。「噫々、もう思ふまい、一層死……、否々、死んぢや彼の幸彦へ、此身の眞實が通ら無い。あゝ、か、悲い、えゝ、逢ひ度い、何處に在なざるんだらう。會度いむよ

う、貴郎ッ、貴郎やあ、」  
我れ知らず、幸彦を叫び呼んで、愕然口を噤み、四邊を秘ツと顧みて、川の瀬に消えて去く、我聲の行衛を追ふ小繁は、力無く柵へ體を寄せてしまふ。  
儚ない戀と知りつゝも、犠牲の爲めに、戀も、愛も無い他人と、物質から來る結婚に、此尊い靈肉の生を、何て汚さう、悲苦をうくるのは、豫ての覺悟として居る。と、夢のやうな、温かい戀を想像て、酔へる辰子は、一家の浮沈問題より、啣つ戀の苦惱が、重大視されて、死も、生も浮べ無く、此處まで來たものゝ、歸家つて結婚を強られるのが、痛切に、心を汚され、傷つけられるやうに恐ろしく、吻乎、深い歎息を吐く途端、愕然と身を慄はせ、顔色を變へて、思はず立ちあがつたのは、小繁が幸彦戀しと、叫んだ聲だ。女ありと、闇夜を隙して、棧橋を覗けば、悄然柵にもたれた小繁を知つて、若しや……と、再び體を戦慄させて、縁臺へ腰を落して思はず板にし搔みつき、或るものを浮想て、己れの悲苦を忘れ、恐怖にみいられて

しまふ。

「……怎麼したのかしら、幸彦が去つた先處さへ明瞭ば、直ぐにも追ひかけてゆき、如何想ひしても、此度は離れ無い、否、別れるものか、例令吾妻家へ抱かへられて居る身だからとて、幸彦からは離れない、もう／＼此様藝妓してまで、他人の御機嫌をとるものか、莫迦らしい、彼の人の顔にもかゝる。え、死、死んでも彦幸と一緒にだ。あ、逢ひ度い、あ、恰度幸ひ、彼方に待乳山の御聖天様が在だ。何卒御聖天様、御利益を持ちまして、此憐れな妾の心をお哀れみ下ださいまして、もと／＼通り、幸彦と夫婦に相成れまするやう。一偏にお願ひ申します。……、南無聖天様……、お願ひで御座いまする。」

掌を合せて、伏し拜んだ小繁を、待合室の縁臺にしがみついて、或る恐怖から、體を慄はせて居た辰子は、何と思つたか、衝つと身を起せば、拜み濟した小繁と、仄暗い街燈の光りに、それと顔見合せ、双方に體を構へて油断無く、愕然なつたま

ま立ち竦んだ。

「……若し、其處に誰人が居るんですか。」

身を起した小繁は、片手を柵へかけて、待合場を覗きながら、前へ歩みかけて、斯う聞いた。

「……はい、居ります……、」

起なほつて、縁臺から立つた辰子は、片足を斜に退いて、恐々答へたが、心臓の鼓動が甚しく、耳を打つ、

「あや、御婦人なのね、まあ……、」

小繁は前へ進んで、女を知つた安堵の胸を撫て昵乎熟視れば、己を疑ふやうに、怪訝な想ひを眼へ浮べてゐるのを見て、はつと我身を顧みながら、辰子をまた見る。夜目にも華美な姿の小繁を眺めた、辰子の胸の恐怖もとれ、懐かし氣に寄つて

「は、爾で御座いますか……、」



と、偶乎仰いで、思はず身を退らせ、夢見る氣になつて、俯臥いて終ふ辰子を、それと知つた小繁は、不審氣に眺めて、頸をかしげ……、

「若しや、貴女は、失禮ですが、赤坂の山村伯爵様のお嬢様では、彼の御座いませんか……」

「はい、山村の娘辰子で、御座います。」

「怎麼も、まあ、似て在らつしやると存じましてね、失禮とは思ひましたが、やつぱり爾で在つしやいましたか、まあ……、怎麼して此處へ……、妾は……」

「否、存じて居ります。大葉様の奥様で……」

「よくお忘れが無く……、夫れは爾うと、貴女は怎麼して此處へお出なすつたのです。御心得違ひ遊ばしたのでは御座いせんか、若し、お嬢様……」

「あれ、お泣き遊ばして、何かお悲しいことでも、若し、妾にお聞かせ下下さいませ」

せな、過日は稻毛で、飛んだ失禮申しあげましたが、彼の節は、遂に神経が興奮して居ましたものですから、前後も見ないで……、お許し遊ばして下下さいまし、それは爾うと、一體此夜更けに唯だおひとりて、怎麼遊ばしたのですか、遠い赤坂から……、それとも道を……、

「否、申し理由が御座いませんで……、」

「えつ、何で御座います。」

「は……、はい、其……、家邸を、無断で出て参りましたので御座います。意識の相違……で……、」

「えつ、」

「否、妾の我儘からで御座います。」

「御嬢様のお身で、夜更けに斯様な場所へお出になるのは、容易な事では御座いませぬが、お邸では、嗚ど皆様が御心配遊ばして在つしやるでせうが……、」

「はい、それは存じて居りますけれど、貴女も此夜更けに……お一人で……、何か……、」

「えつ、はあ、否、ほ、自分の身の上も知ら無いで、まあね、妾も我儘から……でせうが……」

「あの、失禮で御座いますが、旦那様の大葉様と、何か……御争ひでも遊ばして……それで……」

「飛んでも無い、夫れなら怎麼に楽しいでせうが、之れには少し理由が御座います、遂ひ来るとも無く、此場へ参りましたので、狂ひになつたのかも知れません、え、もう一層狂氣ひにても成り度う御座いますわ、頼りに思ふ夫は、未だに行衛が知れず、藝妓稼業だものですから、女の貞操を無視して終ひまして、娼妓同様にても戯ばうと……、それはくお話にならない、お酒の上のて無く、真面目な紳士の行爲に、妾……、遂ひ前後を顧みないで、此處まで走つて來ましたの……」

「まあ……」

「假令藝妓こそすれ、女の道は知つて居ますからね、それに、離れては居れ、未だ妾は幸彦の妻ですもの、此體悉皆が、幸彦の物ですからね、妾の自由には成りませんし、心が承知しませんもの、況して他人の自由に成るやうな、卑賤い女ぢやありません。金や肩書だの、義理に任せられる、吝な心の女ぢやありません。之れでも、貞操の誠に生ようとする、幸彦の妻ですものね、莫迦な真似は仕無いんです。」

「……………」

「それは爾うと、自分の事ばかり申しまして、貴女は怎麼遊ばしてやす。我儘と仰しやいましたが、此場まで御出になるには、何か思ひつめ遊ばした……」

「もう貴女、何も聞き下ださいますな、妾が悪う御座いました。之れから戻りまして、両親へ御安心……させます。そして……、三……原様で……」

「えッ、何ですつて、三原様へ……、怎麼かなさいましたか、御存じなので、彼の

三原様と云ふ支那から戻りました、鑛山業とかの……」

「はい、其三原様を、貴女も御存じて……」

「え、知つてる處か、幸彦の友人でして……」

「えッ、大葉様の御友達……」

「はい、幸彦が親友とまで思つて居ますのに、お話に成ら無い方てしてね、まあ口惜いぢや有りませんか、友人の妻と承知して居ると申して、今夜……」

「えッ、何か失禮な……」

「否、申しますまい、幸彦は、友人と思つて居りますから、反つて、幸彦の恥になります。」

「爾うて御座いますか、何か知りませんが、其三原様の處へ、妾に嫁と兩親が申しましたので……」

「へえ、貴女に、あのお嫁に……、結構ぢや御座いませんか、御兩親様に、何かお

見込みが御座います故、子の幸良かれとお祈りなさつて、貴女に……」

「あれ若し、もうようく兩親の心も解りましたから、妾、之れて戻ります、邸へ歸りまして、三、三原様へ嫁ります。何卒、妾の罪はお許し遊ばして……」

「えッ、何て御座います。」

「はい、妾は、總てを御話し申ませう。それも、貴女の、お美しいお心を見るにつけ、此身の上が恐しく成り、貴女の御苦痛をお察し致しますから、もうく決して、卑賤心は起しません考へてす。それは斯うて御座います。實は、貴女の旦那様大葉幸彦様へ、及ばぬ戀をしかけて居りました。」

「えッ、あの貴女が……」

「はい、何卒お許しを……」

「まあ、」

呆氣にとられた小繁は、呀つと眼を睜つて、昵乎辰子を熟視て、後の言葉が續か

無い、怨めしい気が、胸を湧いて来ると、思はず悄然なつた瞳が光りを持つ。  
 『妾が悪う御座いました。何卒お許しを、それが爲め、三原様の縁談を聞いて、假令親の御命令でも、物質に依る迫害から、精神的に殺してまで、其迫害を逃れる爲め、此體を犠牲にして、愛も無い、戀もしない人の處へ、何て嫁れませう。それも戀知らずに居たのなら、妾も犠牲を嬉んで嫁りましたらう。けれど、美しい愛の光を望んで、戀を知つた妾には、其戀、愛、體、捧た操まで犠牲にして、怎麼三原様の處へゆかれませう。妾は、それが悲く成りまして、死んでせめては、幸彦様へ、妾の心だけでも通じてあげ度いと存じましたが、もう／＼弗つり思ひ諦めます。生命とまで、幸彦様をお慕ひ申しましたが、夢とも見ず、貴女のお優しいお心を見ては、もう／＼妾が悪う御座いました。恐ろしい戀を致しました。何卒、お許し下だせしませし……ね……』

後へ退つて、縁臺へ俯伏した辰子は、身も世も無く泣き悶えて、失つてゆく戀の

苦悲を、痛刻な思ひするのだ。言葉なく聞いて居た小繁は、泣き倒れて居る辰子の脊へ手をかけ、斯うやつて迎る女の想ひの戀の惨しさを、泣かじと唇を喰ひしめて惨しい戀を辿らせる幸彦を、思はず怨んで、愕然身を慄はせ、濟ません……と、心で怨んだ詫びを、居無い幸彦へ仕て、

『若し、お嬢様 判りました。能く貴女のお心は解ました。妾が在る故に、幸彦を貴女が、それ程……思し下されても……、反つて仇にこそなれ、お身のお爲めになら無かつたとは、お氣の毒と申し上げて宜いやら、こ言葉が在りません。之れを幸彦が聞いたら、嘸ぞ喜びませう。妾は覺悟しました。』

『えッ……』

『はい、妾の戀幸彦を貴女へ上げませう。否、差しあげます。けれども、それは戀だけで、反つて御家でお許しなさるまい、ですから、戀はあげませう。が、幸彦は妾のやはり夫で御座います、戀は自由ですからね、能く貴女は、妾の前で惚氣られ

ましたね、そう容易と、幸彦が貴女にとられる位なら、恸まで妾は苦勞をしませ  
んよ。ほ、ほ。」

「あれ貴女、誤解遊ばしては……」

「何が誤解ですよ、誤解も六階もあるものか、冗談ぢや無い、死ぬ程戀しかつたら  
何故お死になさら無いのですよ。憎らしいつちや在りや仕無い。」

「あれ、若し、奥様、それで御座いますから、妾がお詫び申しあげてるので御座い  
ます。何卒、お氣に障ないで、お許し遊ばして、妾……三原様へ嫁て……」

「あれまた。妾病氣が起つて、否、神経症の爲めに、お可哀想に、貴女へまで、  
……濟ませんわね、否、怎麼して貴女を三原なんぞへ……」

嫁るものかと、語尾に押へて、辰子の泣いて詫ぶる體を抱かへ、よゝと其脊へ泣  
き伏した。戀と犠牲とを悶える二人の心は、向島堤の白みゆく朝の露の深くして  
緩やかに流れる瀬音の隅田川は、綾瀬邊りから明て來たかと思見る間に、四邊が冥濛

となつて、沛然夕立雨が降つて來た。

### 野心

— 神經の興奮

狂亂藝妓、本朝午後六時頃淺草區駒形の電車通りを破れた島田鬻から座敷着らし  
い縮緬の衣装までつぶ濡れに成り眼をつり上げて蒼白となつた顔の凄く大聲に何や  
ら唄つたり笑つたりして彷徨て居たのを、通行の巡查の保護を受け、一時警察署へ  
連れゆかれたが、此女は、柳橋の吾妻家の抱へ藝妓小繁(三五)で棄られた情夫戀しと  
狂氣したらしく主人が知らせに依り引き取り行きたる由なるが倫落の末路かまた其  
處には事情の忍びあるらしく狂ひ廻る言葉の中に某華族の名と某實業家の名を口惜  
げに叫んで居た云々……。

不圖、夕刊新聞を手にして、之れを讀んだ大鈴清子は、冷やかな笑みを浮べて、

復新聞へ眼をつけ、

「吾妻家の小繁と云へば、幸彦の奥様だが……、狂ひに成るなんて……、尤も、神經症では以前在つたが、憎らしいね、之れ程まで幸彦を慕ふなんて、早く子爵が何とかすれば、妾の思ひだけだつて、何したもの……、子爵の手に遂無いのぢや……、憎いね、あゝ爾うだ。之れを子爵へ見せて……、ほゝ、さうすれば思ひ込んだ子爵でも、また妾……に……」

莞爾笑つた清子は、大井子爵の令嬢へ對して、家庭教師の任を今日は終へ、歸りかけた玄關で、此夕刊新聞を読み、氣味宜げに顔をあげ、早忽と、玄關横の廊下傳ひに、子爵の書齋を覗き、野心を包んで、

「若し、子爵様、お在遊ばしますか……」

「え、誰れ、あゝ大鈴さんか、さあお入り、何か御用、」

「はい、否、御用と御問ひ遊ばされては困りますが、少し御覽に入れ度いものが御

座いまして、」

「見せ度いものが、はて、まあ此方へお入りなさい。何です、見せるものは、エツ新聞……、何か……」

「はい、此狂亂藝妓をお読み遊ばせ、ほゝ、ほゝ、」

「困るですな、笑つて、何か僕の事でも有るのですか、」

「有るか無いかつて仰しやるが、まあお読み遊ばせ、」

「ひゝ、何、……狂亂藝妓……吾妻家の小繁……うむ狂氣に……、はッはッ、莫遊な女だ、」

「ほゝ、其癖子爵様が、非常御執心でしたとか、」

「那麼事云ふては不可、私は何も知らんが……」

「妾過日でしたつけ、築山の邊りて、藝妓家の主人とかい参りまして、何やらお話しのこと、全部何がひましたが、お癖の悪い子爵様と存じましたわ、ほゝ、」

「やあ、悉く聞かれてしまひましたかな、はッはッ、」  
 「お隠し遊ばすだけ、まだ、ほ、ほ、ほ、けれど某華族を怨んでるとか、書て在り  
 ますが、若しや……」

「うむ、爾うぢやね、私の名でも出ねば宜いが、彼の晩のレコが……、否、はッは  
 ヲはッ、」

「駄目で御座いますよ。過日てしたつけ、御隠居様の御祝ひの時、散々妾を嬉しが  
 らせて、それから後はもう彼の藝妓で御夢中なのですもの、たまにはお名位出て、  
 少しお痛い思ひを遊ばさねば、お懲になりやしませんわ、ほ、ほ、では失禮を……」  
 「やあもう、何とも言葉が無いぢや、爾麼つもりでは無かつたが、何しろ貴女は教  
 育者だし、私も反つてとな、はッくくく、まあく宜ろしわな、て濟んがな、私  
 からは少々都合悪いて、貴女から怎麼ぢやらう。あの藝妓屋へな、教育者に對つ  
 て、甚だ失禮ぢやが、私の一身上を思つてな、一つ見舞……と云ふのも變ぢやが、

様子見ながら、口止めの的に、行つては呉れませんか、若しまた新聞にてもな……」

「あの妾が、藝妓屋へ……、爾うですか、宜ろしう御座います。参りませう。夜は  
 何ですから、明朝でも……、妾も、子爵様の御執心だとかの、其の美しい藝妓さん  
 を、能く拜見して参りませう。ほ、ほ、」

「行つてくれますか、では此處に十圓ありますからな、誠に濟んが是非にな、様子  
 を探つて下ださう、」

「畏まりました。それでは子爵様……」

「御苦勞ぢやつた、」

物質に於ける慾望は、他を顧りみる大井子爵では無いが、併し、それと共に、名  
 が欲かつた。家庭教師の大鈴清子から、渡された新聞記事で、小繁の狂亂云々を讀  
 んで、道がの子爵も、我知らず、己が身を顧りみた、清子へ見舞を口實に、名を惜  
 んで、それが善後策を依頼した。冷笑の裡に、子爵のもとを辭した清子は、偶乎、

前途を望んで、言ひ知れぬ寂莫さにとらはれると、汚ない虚榮から来る、子爵へ對する或る野心が、身を顧みられる程、恥かしく思はれた。

何故自分は、情に對する、理性から直覺する底級と知りつゝ、虚榮を憧憬するのであらう。爾して、情を没却してしまつてまでも、自他を顧みないで、欲望の満足のみを走らうとするのだらう。幸彦の妻で在る、彼の藝妓の小繁との夫婦の仲が、美ましいと云ふよりは、怨めしく、憎らしかつた。其餘りが、幸彦へ子の行彌を渡して、苦を與へようとしたのが、反つて益々密着させるやうな想思に陥入らせて、幸彦と子は行衛知れず、小繁は狂亂の態度、えゝツ、何と云ふ憎いだらう。怨めしい小繁め、明朝様子を見て、狂氣の態を嘲笑してやらねば、此胸が癒無い、「あゝ、慙まで夫婦の愛情は、離れられ無いかしら、憎い、怨めしい、明朝は……と、唇を噛んだ清子は、俯瞰がちに、在りし追憶に及んで、それを迎るやうに、悄然と、飯田町の我家へ戻つて、座敷の正面へ飾つた、行彌の寫眞を仰いで、祕語名を呼ん

で、四邊を見廻しながら、横向た顔へ、涙が滾れた。これが、情……か……と、我知らず心臓を躍らせ、女中と二人暮の、寂莫な室内の時計のセコンドを打つ音に、必と己れを責め苛なまれるのかと、身を慄はせて、情の無い思ひを、自ら悲と歎いて、其儘女中に、聲かけられるまで、俯伏して泣いた。

神經の興奮か、千種な思ひに亂れて、一夜寝眠らて明した清子は、翌朝の割引電車を待ち兼ね、何日も念入な身仕度も、今朝は急速にして、淺草橋で電車を下り、客待俥に乗つて、二三丁の吾妻家まで、俄に張る虚榮を見せようとか、急がせながら、吾妻家と書かれた電燈の下で俥を下り、隠すやうに賃金を拂つて、溝板まで一尺ばかりの窓下の地へ、二三尺許の杉の植込を圍つた、柵の端へ手をかけて、格子戸を覗くと、花柳界の常例で、割引電車の通つてしまつても、十時過ぎねば起きぬ稼業の、未だ今頃は夜半時分、昨夜閉めたまゝ、開いた様子も無い。

「おや、まだお寝眠かしら……、叩いて起そか……、否、反つてそれでは不可まい、



起きるまで待つとして……、何時ごろ起きるか、他で……」  
と、四邊を眺めて、宿俵屋へ歩み寄つた清子は、間もなく足を返して、電車街路へ去つた。

何處へ行つたのか、暫時して、バナ、や林檎等を入れた、菓物の籠を抱かへて、吾妻家の格子戸を訪うた時には家の前は掃れて、塵一つ無く、水までまかれて、朝の稽古三味線の音が、窓の障子を抜けて聞こえる。

「御免下さいまし、」

「はい、誰人……」

奥からバタ／＼と、疊へ音させて、半玉の豆子が出て來ながら、障子を開けて、見なれぬ清子の姿に、怪訝な面を仰いで、昵乎見る。

「若し、此方は……あの、吾妻家さんと仰しやいますね、」

「はい、吾妻家は妾ですが……」

「爾うですか、ては甚だ恐れ入りますが、あの御主人は在つしやいませうか、妾は牛込の大井子爵家から参りましたもので、是非御主人に、お目にかゝり度いので御座いますが、怎麼て御座いますか、」

「はあ、爾うて御座いますか、少々お待ちなすつて、」

奥へ行つた豆子は、間もなく出て來て、

「怎麼云ふ御用か知りませんが、何卒あがり下下さいまして、唯今主人が、あの……お目にかゝり……」

「爾うて御座いますか、ては御免下さいまし、」

「さあ何卒……」

何日もなら、二三度は辭退して、容易には上ら無い清子は、半玉の進める言葉を待ち兼ねたやうに、下駄を脱揃へて、羽二重紫紺色絹の道行を脱ぎながら、入口の室へあがり、袖疊にして其處へ置き、錦沙縮緬の帯の前を撫で、長襦袢とお召織の着

衣とを重たまゝ、後の裾を踏むて襟を直し、鬢の亂毛を搔いた櫛を、帯の間へ仕舞ひ、果物の籠を手にするると、

「何方へ、御主人が……」

「はあ、此方です、」

清子の身仕舞ひする様に、呆氣となつた半玉は、慌たやうに、清子の聲にはつと案内に立つ。一間置いた茶の間へ案内して、座布団をすしめ、

「さあ、お敷なさいまし、あの此方が御主人で……」

「爾うて御座いますか、始めてお目にかゝりますが……」

「貴女は、牛込の……とか、私が主人……」

「はあ、大井子爵家から参りましたもので……」

「爾うだとか、何か御用でも……」

「はい、あの之れは、甚だ失禮ですが、ほんのお邸からの何て御座いまして、何卒

お納を……」

と、挨拶を仕乍ら、衝いた手に、果物の籠を執り、前へ差し出して、改まつたやうに、手を膝へ置く。

「否、それは困りますな、何日も御ひきに成つて居りますんで、那麽物を頂戴しちや、恐れ入ります。」

「いえ、反つてお恥かしいので、」

「時に、其御用とかは……」

「はア、實は、何て御座います。昨夜夕刊新聞で、此方の藝妓さんとか、御病氣だと云ふのを、子爵が讀みまして、非常に御心配遊ばし、其お見舞に出ましたのですが、怎麼云ふ御様子で……」

「あの小繁と云ふ藝妓ですか、怎麼も御心配に預りまして、誠に恐れ入ります。實は何てした、川へ身でも投げたのか、びしよ濡れになつた上、氣まで狂ひやしてな、

いや早や人騒せを遣りましたが、赤坂とかの華族さんから、非常に同情なさいましたな、身受けしたばかりか、田端とかの狂ひ病院へ入れなすつたのが、昨日の事でもう家には居りません、へい、」

「えッ、あの當家には……」

「へい、身受けになりましたして、病院とかへ……、へい、態々怎麼も、御遠方の處を恐れ入りましたして御座います。何卒お歸りでしたら、宜ろしくお願ひを、へい、」

眼を睜つて、夢のやうな話を聞かされ、呆然と思ひに耽る傍から、小繁の事なら……と、人情の有無は花柳界の常で、體よく歸さうとするのを耳にした清子は、居たしまれ無い程、莫迦にされたやうに、腹だしく思はれた。後を問ふ言葉も無く送り出されて、格子戸を出た時、胸を壓いて、歎息が吻乎吐るとともに、思はず我身を顧みて、何となく寂莫さに襲れた。

靈肉

一

妾が汚なからうが

煤煙の川とも云ふ深川區の小名木川岸は、各所から集る船の荷を、倉庫へ運び入るゝ便宜と、煤煙の原料なる石炭を、各工場へ運搬するので、敗殘者てふ影につきまとはれた人足等が、肩のみ怒らせて、生る爲めの食を得ようとし船から倉庫へ、工場へと、悲哀を漾よはせた面の瘦疲て、吸汲と動いて居る。

船へ架渡された、一尺ばかりの板を踏んで、春へ入れた石炭を荷負いだ。睡眠不足らしい顔の鈍濁色黒く、頬骨の出で、きりつと結んだ唇の精氣無く、斷息體に力盡てか蹠踉として動く男の後から、體の力に依つて食を得る満足のみを生てゆかるとする。恥も無い、望も無い、國家も無い、況て社會觀念は仲間より無いらしい巖健な男が、憎さげな面を冷やかにして、荷負だ春を發止とあてた。

「呀ッ、」と、

荷の重量に、平均を失はれて衝きあてられた男は、横倒しに、畚の石炭を散亂して轉倒つた。

「態ア見やがれ、意氣地無しめ、」

後顧みもせず、鼻唄で去つてしまふ、慌て起きあがつた男は、散亂された石炭を拾ひ集めて、再度畚の中へ入れ、天秤を直して、肩へ荷ぐ途端に、復後から来た仲間が、前の荷を衝きあてながら、手まで添て突き倒す。「呀ッ」と、叫んでまた轉倒つた男は、強く膝の邊りを打つたらしく、暫時は起きあがられなかつた。

「やい、確りしろやいつ、何でえ、米の飯喰つてやがつて、老耄する年齢でも在るめえ、」

棄て詞を後に、嘲笑らつて、去過しまふ。眼に涙を浮べて、痛む膝頭を押へながら、畚から落れた石炭を拾ひ、天秤へ肩を入れようとする男は、三度後から仲間

衝き倒された。爾うして、同じ極つた棄て詞を浴せられ、嘲笑ひを殘されて、振り顧もされず去かれてしまふ。痛む膝を、石炭の角でまた打つたか、膝を押へて蹲居んで、言葉なく俯瞰してしまつた。

「やい、怎麼した。おい、瘦たの、何泣いてやがるんだ、良年齢しやがつて、確りしろいつ、」

聲が變つて居たので、偶乎頭をあげた、彼の男は、人足の小頭と知つて、慌て天秤を手に執りつゝ、顔を澁めて、痛む邊りに氣を配り、腰をかゝめて泣然と涙を落す。

「な何を、愚圖々々してやがるんでえ、江戸は氣が早えよ、金とつて飯を食ふのぢや無えか、」

「……………」

「早く運ば無えか、えつ、何を愚圖ついでやがるんだ。」

「は……はッ、」

「はいぢや無え、飯の種を運ぶんぢや無えか、」

「はい、唯今……」

「あや／＼、涙出してやがるな、笑はせやがる、男の癖に。うむ、よし／＼今日は止めな、お前一人の爲めに、稼業に障つちや不可えから、止しなく、」

「否、一生懸命にやりますから……」

「働なら確り遣り無えな、」

「はい、致します、」

痛む足に力をくじかれて、もう荷負ぐ精が肩に無い、否全體に、其精力が消えて肩をあげる天秤が、食ひ入るやうに體を押へて、腰をたてる途端に、足の踏む重眞が放れて、踰と横へ進んで、ばつたり前へ反つて倒れた。先刻つから、憎さげに此態度を眺めて居た小頭は、衝つと足を早めると、突如彼の男の天秤を奪つて眼の

凄く睨みつけ、

「莫迦野郎ッ、汝にや米の飯が従か無えのだ。態ア見やがれ、もう頼ま無え、止めちめえな、え、止せつたら、頼ま無えのだよ。呆助らつばめ、」

「あ、若し、私が悪かつたです。何卒……」

「え、ッ、何がですてえ、知ら無えやいッ、」

慌て、生を望む食の天秤へ紐つた男を、憎氣に衝き放して、早ツ／＼と、小頭は去つてしまつた。其後を見送つた男は、石炭の入れられた畚へ俯伏して、肩て息を斷續せながら、膝の痛む邊りを撫つた。

「はい／＼御免よ。御免……、あい若衆さん、濟無えが、避て貰えませんかね、え

若衆さん……」

女工體の客を乗せた俵夫が、楫棒を反せ加減に、倒れて居る男に對つて、困つたらしい態度をする。

「おい俵夫さん。横着を極め込んでやがるんだから、遠慮なく其男を轢いて遣んな、俺方が承知なんだ。」

「へい、へッへッ、」

「構は無えんだよ。第一天下の街路なんだから。俺方が遠慮するんだ。さア行き無え、やいッ、避け無えか、え、え、ッ、唐變木め、避けつたら、」

石炭の上に、俯伏て居た男は、愕然頭をあげる刹那、發止……と、怒鳴つた小頭が、拳を横に振つて、其頭を打つと、復續けて殴りながら、足蹴にするやうに追ひたて、俵を通ほして遣るや、唾を吐きつけ、

「莫迦野郎ッ、汝が街路を邪魔しやがるもんだから、巡査に怒かされるんだ。態ア見やがれ、」

「……………」

「え、ッ、未だ其處に居やがるな、早く避け無えか、動けつたら、此處は街路だぜ、

俺方が迷惑すらあな、」

「はい、唯今避きます。悪う御座いました。あつ、痛つ、はい、唯今、足が痛みますものですから、」

「何だ、足が痛む、汝が悪いからだ。横着だからだよ。仕事を惜みやがるからだ。態あ見やがれ、」

「……あッ、痛つッ、痛ッ……、」

再度び、ばつたり倒れた男を、舌打ちして憎さ氣に睨みつけて居たが、彼方からまた馳つて來た俵を見るより、氣も荒々しく、倒れて悶えて居た男の襟頭をとつて小突き廻すやうに、煉瓦塀際へ押し避け、

「やい、未だ横着極めやがるな、え、え、ッ、斯うして遣るぞ、汝のお蔭で、他人足の邪魔にならあ、」

「ど、何卒、御許しを、直ぐ、直ぐ參りますから、あッ痛ッ、御勘辨を、うむ、痛

ッ、あッ、ど何卒……」

「えいッ、怎麼も斯うも在るけえ、斯うすりや少しは性根に堪へるだらう。えいッ  
斯う……」

發止々々と、顔手足の嫌なく、あたるに任せて、殴打据る。百鬼夜行のやうな姿  
をした他の人足等は、氣の毒と云ふ同情は無く、むしろ卑見むやうな、殴打れて居  
る男を眺めて、食の種を運んで居る。

姿態様の人足等の間を別て、急ぐやうに馳つて來た俥夫が、此處まで來ると、俥上  
の客が、何思つたか、

「あゝ若し、一寸お待ち下さい、おい俥夫、下ろしてお呉れ、良いのだから下ろ  
しておくれ、」

俥から下りた、紺洋服を着て、金縁の眼鏡をかけた、色の白い顔を澁めるやうに  
眉を寄せて、憤怒にまかせて殴打て居た、人足の小頭を制した若い紳士は、尙打た

うとする腕を押へ、なだめるやうにして、

「若し、何の爲めにか知らんが、反抗も無く、あゝして倒れて居る者を、爾う打  
ちになつては、貴方のはッはッ、否、許してお遣りなさい、私からお詫びします、  
何卒な、許して遣つて下さい、」

「む、何ね許すも許さ無えも無えのだが、餘り世話やかせやがるものだから、遂  
ひ、腹が立つてね、一體懶怠者の横着野郎なんて、他の人足等の爲めに成りやせん  
からね、へッへッ、宜うがす。お前様のお顔をたてやして、まあ許して遣りやせう、  
やいつ、叩き殺されるのを助かりやがつて、有り難く思へ、莫迦野郎め、態あ見や  
がれつ、へッへッ、」

肩で嘲笑て、止めたのを折に、前の工場の門へ入つて終ふ小頭の後を見送つた紳  
士は、倒れて居る男の顔を覗いて、愕乎したやうに、急がはしく抱き起し、  
「らむ……、餘程變つたが、……、若しや……、爾うだ。おい俥夫つ、此方をお乗

せしてくれ、何宜ろしいのだ、構はん、乗せてあげてくれ、」

「えつ、此人足を……、」

「うむ、まあ宜ろしいから乗せてあげてくれ、若し貴方、見れば餘程お痛いらしいが、お宅は何方ですか、此俵で送らせしますから、遠慮は無いです。」

「あッ、うむ、否、飛んでも無い、それには及びません、直き宅ですから、決して御心配には。有りが度う存じますが、お断り……を、はい致し……」

と云ひながら、親切なと、掛けられた紳士の言葉に、温かい思ひを湧して、不圖面をあげると、

「呀ッ」と、

反かへるやうに、驚いて、後へ踰と退つたまへ、俯瞰してしまつた。莞爾笑た紳士は退る拍子に倒れかゝる人足を抱へ、

「やつぱり君ぢやつたね、僕は心配して居たよ。よく無事で居てくれた。台度いと

思つてね、探したぞ。」

「ひ、松浦君だつたか、飛んだ態の處で、面目無い、」

「はッはッ、何が恥か、神聖な労働ぢや無いか、虚榮の社會からは、或は敗殘者の群れとも呼ばれやうが、それは、此労働者の意味を知ら無いからだ。腕に依る生の食は、それ等の血をすゝつて呑む、虚榮者等よりは、美しいものだ。力の在るものだ。併し、貴方の無事で居たのが嬉しい、」

「否、無事で居たのぢや無い、生て居たい爲めに、斯うして息を吐て居たのだ。命をながく……、」

「はッはッ、莫迦な、君が其生のみに命をつないで居る人なら、僕は貴方を慕やせん。汚らしい此川の水も、其力あればこそ、利用されて居るのだ。否邪魔扱ひにはされてまい、おれのやうに。僕は君を知つて居る、假令君の姿が汚なからうが、表面を慕ふ僕ぢや無い、君は、僕を、信じて居るやうな、不信らしい態度をする



のを、何日も怨んで居る。そりや僕の職業が、名こそ社會教導職で、卑見されて居る活動辯士故、友とも思ふまいが、僕は、職業の貴賤を問うて生て居る人間ぢや無い、充實した生活を望んで、社會へ働いて居るんだ。僕は、君を信じて居る。信じて居ればこそ、慕つて居るんだ。はッはッ、遂ひ失禮な事を云ふちやつたね、之れも君を慕つて居る餘りだ。併し、今何處に居るんですか、」

「面目無い、濟んです。僕のやうなものでも、貴方の慕つて下さるのは能く知つて居る。況て學校時代から、君の虚榮の社會を嫌つて、危險的思想を追ふまで、充實した創造社會を絶叫したのを、僕は嬉しく思つて居た。けれども、中學を出て、相互に學校と科目とが違ふに従れ、其人の性格をも一變してくる。僕は、貴方が、假令活動の辯士だからとて、それを卑見する男ぢや無い、僕はね、絶ず或る考へのみを作る爲めに、社會から時としては誤解されて居る、其のやうに、或は貴方も誤解して居るのだ。否、それは兎に角、よく救つてくれました。何、大夫丈です。あ

ッ、痛ッ、歩けます。有りが度う。力と生存とに於ける、制裁を與へられたのですから、此位の痛いのは、はッはッ、ぢや之れて……」

「えッ、君、去くのか、」

「うむ、厚意は謝すが、僕は、職を止めさせられたのだから、第二の生に對する食を得んけりや、可愛い子供とが、生て行かれ無い、」

「むい、諾し、別れやう。併し、君の事業は……」

「はッはッ、問ふまでも無い、もう……止めた、」

「えい、止めた。君つ、な泣てるな、」

「な泣ん、事業に生た僕も、子の愛に對する愛を誤解して、事業は止めて、そして生の爲めに……」

「大葉君……」

「……」

「幸彦君、君は僕を信じてくれんか、」  
 「信じるとは……」

「失敬ぢやが、知つての通り僕は、薄給の活辯だ。併し、過去に變ら無い、充實した社會の創造者だ。白布の舞臺で、事毎にふれては、それが絶叫もするが、聞かせて居る時だけは、観客が聞いてもくれるが、電氣の明るく燈されると、もう忘れて居る。僕の誠意は、暗い中だけで、何日も暗い心で居るんだ。君、せめて其萬分の一だけでもと思つて、僕の誠ある味を受けてはくれまいか……」  
 「と云ふのは……」

「君の事業へ、僕の意だけでもいれて、以前の通り、研究されて欲しいのだ。失敬だが、僕の薄給を呈しても宜い、そりや君は受けまい、僕にも、妻もあり、子もある、生てゆかねば成ら無い、併し、生活に對しては、充分ならねど、困難を感じ無い、だから、其薄給の一部だけを、研究費の中へ入れて、事業の發達を期して貰ひ度い。」

「感謝する。僕は、如何な人の補助があらうとも、受け無いて、研究を續けて居たんだ。併し、君の温かい厚意は改めて受けやう、喜んで受ける。」

「えッ、受けてくれる。有りが度う。僕は禮を云ふ。」

「松浦君、實は、一歩で成功するんだ。」

「えッ、研究が終るのか、」

「うむ、社會での成功は如何か知らんが、僕の確信する處では、十分に見込んで居るんだ。安心してくれ給へ、僕は君に感謝をすると共に、研究の一端を洩し、君の厚意に報ゆるんだ。」

「やあ爾うか、有りが度う、僕も嬉しい。」

衝うつと寄つた二人は期せずして手を執り、堅く握り合つた掌裡が、温く五官の血を沸して、泫然と涙を流して、温い情の友と、成功に近よつた友とが、相互に知つたを嬉しと、濁つた小名木川の水へ、清い涙の零を落して、移りゆく人の世に、

冷やかな秋の夕空を仰いで泣いた。

同 二 可愛の子の犠牲

世の嘲笑、生の苦、親兄弟姉妹の悲別、夫婦の哀離、先妻へ對する子の情、總てを胸に泣き歎いて、犠牲となりつゝ、友の勧めに勵まされて再び發動機の研究に没頭してしまつた幸彦は、煙汚た裏長屋の一室を、一大事業の工場と見て、もう勞働の困疲も無く、研究に耽られた。

「うむ、此壓力で、機械が動いて、廻轉する車が、一分間に五萬數となれば、それに依る熱の冷却器が之れて、風力も、此機の上さへ完全すれば、十分の成功……ぢや無い、飛行機とすれば、飛行も安易に出来るのだ。併し、廻轉に依る内機は宜いとして、此熱と冷却だ。之れが熱度を増す毎に、絶ず壓へつゝ冷却させるには……」

…はて、うむ……」

模型とは云へ、殆ど完全機に近い發動機へ手をかけて、其處此處の齒車や何かへ油を注いで、機發油を油壺へあげ、腕を組んで、暫時沈黙思を續けて居たが、偶然顔をあげて、機の傍へ淋し氣に坐つて居た、行彌と眼を見合せ、莞爾微笑んで、手をあげながら、

「はッはッ、よく柔順くして居た。さあ此方へお出で、」

嬉し氣に立ちあがつた行彌は、莞爾々々笑ひながら、幸彦の招くにつれて、其膝へ抱かれる、

「あゝ、可哀想にな、お父様が、御用してばかり居るものだから、坊やも構は無いてな、淋しかつたらう、」

「お父様、之れ未だ出来ないの、」

「うむ、未だどがね、既直に出来るよ、」

「爾う、出来ると、怎麼するの……」

「出来るかね、船や、自動車や、飛行機などに遣ふのだよ。そしてね、坊の好きな物が買ふんだよ。」

「眞實、嬉しいな、爾ちたら、何買ひまぢよう。自動車は不要ち、飛行機もお父様が拵へるち、えい、鐵砲と、洋刀と、旗と買ひまぢようね、」

「うむ、宜しく、」

「ちよれから、學校へ行くの、本も買ふの、ねお父様、靴も買つて下だちやいね、靴もよ、」

「あ、宜し、何でも買つてあげるよ、坊は良い子だからね、お父様の云ふ通り、立派な人に成らなければ不可せんよ。近所の子供と一緒になつて、其處いらを騒いで遊ばないで、お父様の傍を離れちや不可せんよ。解つたかい、」

「えい、だけれど、ひとりぢや没興味の……」

と涙ぐんで、ひとり寂しい氣分を浮べる。可憐しいのが、現在と見えた、それを慰める術が無い。

「お、爾うだつたつけ、未だ晝食の支度をせんのだつたね、腹が空たらう許しておくれ、お父様は、自分の事ばかり夢中で、坊の事を忘れて終つてなう、」

「御父様、あの御飯……、坊ね、未だ慾が無いの、」

「うむ、爾うか、まあお待ち、直ぐ拵へて遣るからね、」

「えい、」

嘸ど、腹を空したらう。己が事業には胃の腑の不満足も、何等成功の前には、苦痛を感じも仕無いが、食べるより慰みも無い子供には、腹を空せるのが、愛育するのに、其品性を傷つけてしまふ。勝手許へ立つて去つた、幸彦の後を、寂しさうに仰いだ行彌は、所在無さま、發動機の模型を眺めて、推進器やうの車へ手をかけた。「お父様は、之れ怎麼ちゆるのだらう。」

と、鉦へ手が障る瞬間、ぱつつと火の閃きが、行彌の眼を打つや、轟々の音響は此裏長屋を震はせて、

「呀ッ、お父様……、」

斯ふ聲を挙げたまふ、後へ反ぞつて、ぱつくり倒れて終つた。此物音に、愕然、臺所から駆けつけた幸彦は、廻轉する發動機を眺めて、慌て廻轉を止めかゝり、

「うむ、て出来た。えッ、成功……、あ、出来たぞ。坊や、坊や、お父様の研究が……、やッ、」

不圖、氣絶して倒れて居る、我行彌を見るより、狼狽て廻轉を止め、倒れし行彌を抱起しながら、

「お、坊や、」

行彌の體を揺り動かして、大聲に名を叫べど、眼も開かねば、口も開かない、そればかりか、頭髮から着衣へかけて上半分、見るも悲惨極まりなく焼傷たゞれて、

機發油を浴びた臭氣が、鼻を打つて、徒戯からの原因は知つたが、もう機械の研究所ぢや無い、行彌あつての生命とまで、思つた愛の苦しい生を續けた幸彦は、歎く胸の悲しみより、呆氣にとられて、氣も轉倒するばかりだ。潜々と、止めど無く流れ出る涙を、拭ぐひもせず、行彌を確と抱かへながら、

「これつ、行彌、坊ッ、坊やあつ、確りしてくれ、行彌ッやッ、あ、こ困つた事、坊ッ……、坊やッ、」

「若し、怎麼かしたかね、えッ、何ですかね、」

半狂亂になつた。幸彦の耳へ、二三間先隣りの家の者らしい聲がしたので、偶乎外を眺め、

「お、濟ません。子供が其何です。醫者を呼んで下さいましな。お願いです、お早くな、」

「えッ、そやう大變だ。宜うがす、一走り行つて來ませう。まあ待つて居なせい、

何直ぐだ。」

溝板を、自棄に踏み鳴らして、先隣家の男は、飛ぶやうに、走り出して去つた。行彌を抱かへて、それを追ひ頼むやうに、入口まで歩んだ幸彦は、偶乎、臺所の水桶に気がつき、慌て子杓に水を汲み、口へ含むや、行彌の顔へ吹きかけ、  
「坊ッ坊やッ、行彌ッ、坊やッ……」  
「わあッ、」

と叫んで、ぱちりと眼を開けたが、直ぐ閉じて終つて、體を恐襲るやうにもがいて、泣き叫び出した行彌の光景に、吻つと胸を撫下ろし、

「あゝ、気がついたか、確りしろッ、坊や、あゝ、可哀想になう。宜しく、善子ちゃん、泣くんぢや無い、あゝ、痛い、坊は強いから、泣くんぢや無い、」

「あゝ、痛いようッ、痛いようッ、」  
「あゝ、何だ。もう直ぐ全快からなう、確りしておくれよ。坊は強いものな、お父

様の子だもの、」

焼父傷の苦痛に、泣き叫ぶ行彌を、なだめすかして、抱かへて幸彦は、自分の胸が苦しむ、

「さあ來ましたよ、お医者様が、えゝ、先生様ですよ。」  
「えッ、医者か、あゝ爾うですか、有りが度う、御苦勞様、さあ何卒、汚ない處で濟ませんてした。」

「否、お構いなさるな、御病人はおゝお子さんか、」

汚れ朽た疊の上へ、氣輕さうにあがつて來た醫者の坂本老人は、幸彦に抱かれて泣き叫んで體をもかく行彌を眺め、厭がる脈や、體などを診斷したが、眉を寄せて氣の毒さうな面をあげ、

「む……、な、少し……困りましたな、」  
「えゝ……、だ駄目ですか……」

「先づ……、併し、薬はあげますがな、子供の事だし、まあ、力を落さないで、大事にしてあげなさい……」

「あ、爾うですか、御苦勞様でした、」

抱かへた腕に力がぬけ、思はず膝から行彌を放して、わつと聲を發て男泣きに泣き悶えた。

「大葉君、幸彦君、其處で何をして居る。怎麼した、」

不審氣に、門を訪うた洋服の紳士は、室の入口へ腰をかけて、靴を手早く脱りながら、何時集まつたか、氣の毒さうに坐つて、顔見合せて居る、近所の女房が三四名、上つて來た紳士を仰いで、前の合ぬ着衣を無理に合せて、慌て挨拶の頭を下げる。軽く答禮を彼の紳士は、泣き咽鳴んで居る幸彦の脊へ手をかけ、

「大葉君、幸彦君、怎麼したんかい、」

「む、あ、誰人か、もう此僕には、名は無いのだ。」

「何を没常識、名は無くとも、生命はあらう、」

「む、否、もう生命も望まん、」

「莫迦ッ、君には、國家が見えぬか、社會を知らんか、」

「うむ、」

「幸彦君、解つたか、僕だ、松浦寛一だが怎麼した、」

「む、松浦君か……」

行彌の體から、顔を放して、松浦を仰いで、泫然と涙を落して、悲惨な態度に死んだ、行彌の亡骸を指して、眼を押へ、突然松浦の手を掴むと、

「可愛の子の生命を犠牲つて、發動機の成功はしたが、もう僕の生命も、之れて盡るか……、僕は、國家社會を思ふから、總ての戀、愛をさへげて、此事業に全力を盡した。それが、成功の瞬間には、可愛の子を犠牲にさらつて去つて、僕には、子の犠牲に對する、成功の賜だけだ。心の入つた。其印だけだ。あ、何がなんだか

もう頭腦が滅茶滅茶だ、」

「確りしてくれ給へ、怎麼したつて、子供が死んだ、」

「うむ、行彌が、偶然した動機で、發動機は成功したが、可愛の生命たる行彌が、此慘酷しい亡骸……」

「む、犠牲を拂つて……、其交換に……」

「事業の前には、必ず犠牲もいとは無からうが、」

「イヤ實際偶然とは云へ、親が苦心の作へ成功を與へたのは親の愛に酬ゆる尊い犠牲だ。必らず快く眠つて去つたのだ、喜んで死去たのだ。どれ、僕にも拜ませてくれ、泣かせろッ、」

尊い犠牲の子を松浦は昵乎望んで、後生の唱名をしたが、泫然と涙を疊へ落して掴まれた幸彦の手を握りかへしたが、其手はワナ／＼と戦いて居た。

同 三

お 藤 枝 と

地方では喜びに満ちて、久し振りに晴れた太陽の下に、刈入れの稻を眺めて、豊作の自慢に耽らうとする空の中へ、塵煙を飛散させて、都會を斜めに走しさせた自動車、上野を根津の街路へ出ると、動坂を右に折れ曲つて、過去思出を偲ぶ相染川の橋を越え、道灌山病院門内へ、警笛と共に入つた。

自動車から下りた、辰子、幸彦、松浦、清子の四人は、看護婦に出迎されて、急がはしくS號と證された病室へ案内された。

「若し、秋田様、お客様で御座います、」

「……爾うですか、」

力無く、病み疲れた體を僅に横へ動かして、ぱつちりと開けた眼に、涙を浮べて



昵乎熱視る。

「奥様、怎麼で在つしやいますか、あの、お喜び下さいませ、旦那様を……、お連れ申しました。」

「繁子、僕が来たぞ。明瞭か……」

「あれ、貴郎……」

病體を動かして、起きあがらうと藻搔くの、幸彦は後から抱へて、己れの腕へ縋らせると、嬉しさうに其胸へ頭髮をうづめて、よゝと體を慄はせて泣く。

「繁子、瘦たなう。確りしてくれ、苦勞をかけた。」

「貴郎、逢ひ、會ひ度う御座いましたよう……」

「む、無理はない、許してくれ、僕が淺薄な心から、飛んだ苦勞をかけて終つたな、」

「否、妾が……、悪かつたので御座います。」

「否、お前が悪いのぢや無い、人の世なのだ。な、」

「はい、能くお出て下さいました。妾……嬉しう……御座います。妾……の胸も解りまして。」

「うむ、お前の胸を知つたからこそ、斯うして来たんだ。よく思つて居て、僕へ對する貞操を全うしてくれた。女の道をよく守つた。僕は嬉しい……」

「貴郎、妾も……」

「これ繁子、怎麼した。確りしてくれ、」

「は……はい、胸が……、痛み……まして……」

「胸が痛む、うむ、此處か、どれ、擦つてあげやう、」

「貴郎ッ、」

「む、繁子ッ、」

擦り撫てる幸彦の腕に縋つて、嬉し泣きする繁子を、可哀しと抱いて、泫然と涙に泣けば、周囲の男女等も、涙を誘はれて、悲しと泣きぢやくつた。

「貴郎、もう妾……徒目よ、」

「えッ、駄目だ。何が駄目なんだ、」

「何がつて、もう貴郎のお側へ参れませんか……わよ、」

「莫迦な事を云へ、お前は僕の妻ぢや無いか、何の爲めに、貞操を全ふしたんだ。え、繁子、妻ぢや無いか、な、何を泣くんだ。」

「はい、嬉しう御座います。な、泣き度か有りませんが、う、嬉しい……ので、貴郎、けれども……ね、妾の魂は参られませうが、お側に居たいも、もう此病氣では……、貴郎つ……あッ、痛ッ、あゝ、」

「繁子、な、何を云ふのだ。氣の弱い、確りしてくれんぢや、僕が困るぢや無いかえ、僕の妻ぢやないか、那麼意氣地が無くつて、怎麼する。」

「はッ、」

地の底から、叫ぶやうな聲をして、沁々と抱へる幸彦の腕に縋りついて、周囲の

男女等を見廻したが、力無く眼を閉ぢて、眠りかけてしまふ。

「これ繁子、怎麼した。眠いか……」

「いゝえ、眠かありません。貴郎……、あの……御研究は……、して在つしやいますか、え……」

「これ、眠つちや不可、うむ、繁子、お前も喜んでくれんぢや不可よ。あのな、此處へお在の友人のお蔭で、僕は、豫ての研究が、成功したんだぞ、」

「えッ、眞實……、」

「うむ、事實だ。それについてな、話すが、其研究の成功を得たのも、一つはお前の力も在る、と共に、其處に居る清子さんと、僕との仲に出来た、お前の知つて居る行彌がな、尊い……犠牲を拂つて、死んだ瞬間に、苦心の研究が、偶然にも、成功されたんだ。え、喜んでくれ、成功したんだよ、」

「えッ、まあ、嬉しい、ですが、坊やが……か、可哀想……ね、あゝ、清子さん

濟すかまませんでしたわね、許ゆるして下さい、妾わがしも後から……坊ぼうやの處ところへ……」  
 「若もし、奥おく様、何なにを仰おつしやるのです。坊ぼうの死しんだのは、事じ業げふの爲ためですよ。惜をしい事ことが、あ、有ありますものか、夫それよりは、一いち日も早はやくお體からだを全ぜん治ちて……幸だん彦な様のお側そばへ参まゐりました、坊ぼうのやうに、お慰なぐさめ申まうして下くださいまし、ね、夫それが妾わがしの……お願ねがひてすし、坊ぼうも貴あな女の爲ために、彼あの世よへ参まゐりましたんですわよ。喜よろこんで遣やつてこそ、坊ぼうの爲ためで御ご座ざいます。」

「え、濟すかまません、全ぜん治ち度たいので御ご座ざいますが、もう覺かく悟ごして居ゐます。あ、爾さうでした。貴あな郎ら……」

「何なんだい、」

「あ……、山やま村むらのお嬢ぢやう様さまへね、能よく御ご禮らいして下くださいまし、妾わがしが、病こ院いへ参まゐられましたり、借しやく用ようのお金かねを返かへ濟すかれましたりしたのは、皆みなお嬢ぢやう様さまのお蔭かげですよ、」

「ひい、」

「能よくお禮らいして下くださいまし、あ、之これれて……否いや、未まだあるわ、彼あの貴あな郎らッ、妾わがしがね、死しんで去いくのにつきました、其その最さい期きのお願ねがひで御ご座ざい……ます、」

「莫ば迦かな事ことを云いふものぢや無い、何なにが死し……死しぬ、お前まへは、死しんぢや不可いけないのだぞ。未まだ用ようの在ある體からだだよ。何い日つまでも、僕ぼくの妻つまとして、側そばに居ゐる身みぢやないか、縁えん起きても無ないことを云いふてくれるな、」

「はい、嬉うれしう御ご座ざいます。何い日つ迄までも、お側そばに置おかして戴いたさ度たう存ぞんじますか……もう覺かく悟ごして居ゐますわよ。貴あな郎らのお優やさしいお言こと葉はや御ご親しん切せつのこと、忘わすれやしませんねえ、貴あな郎ら……、之これだけは、是ぜ非ひ聞きいて下くださいな、お願ねがひですから……」

「うむ、何なんのことか知しら無ないが、お前まへは没つ常じょう識しことを考かんへないで、僕ぼくを考かんへてくれんければ不可い可かよ。早はやく全ぜん快くわいな、僕ぼくの爲ために、尙なほ内ない助じよの力ちからを添そへてくれなけりや困こまるよ。え、解わかつたかい、」

「は……はい、あ、お側そばに居ゐたい、在あたいけれど、もう……、貴あな郎ら、許ゆるして下ください

「勘忍してね、」

「没常識ことを、云ふものぢや無い、確りして、早く全快やうにしてくれ、え、繁子、お前は妻だよ。自分を忘れちや成らんぞ。氣を落さんでな、」

「は……はい、あゝ、生度い、否、妾は、坊の處へ參ります。彼の坊やは、妾の大仕事な子ですもの……」

「あゝ、能く云うた。行彌は、お前の子だぞ。僕との仲に産た。あゝ、坊やも必度喜んで居るだらう。僕は、お前に禮を云ひます。能く云うてくれた。それで行彌も清子さんも復活したんだ。」

「奥様、有りが度う御座います。嬉しう存じます。此清から、厚く御禮を申し上げます奥様……」

「否、飛んでも無い、妾こそ……、あッ、あッ、あゝ胸が、貴郎ッ、く、苦しいッあゝ、あッ、……」

「ひゝ、痛むか、おゝ宜しく、確りしろ……」

「あゝ、少し……、良く成りました——」

「爾うか、それは可いが、餘り没常識事を考へたり、云ふからだよ。確りしてくれんぢや、折角の事業も、……繁子な、全快つてくれ、」

「は……はい、ですが貴郎、御親切は喜んで受けますが、もう駄目で……あッ、御座います。咽喉の處が……斯う……變て……あゝ、ねえ貴郎、聞いて下さら無さ、」

「何を……」

「あの……、妾ね——妾の戀しい貴郎への思ひは、彼の……お嬢様へ……あげ……失禮で御座いますが、お嬢様は、什麼にか、貴郎をお戀ひ申して居りましたらう。數有る御喜びを棄てなさいまして、妾を病院へ入れたのも、貴郎への御思ひからです。御自分の、苦しい戀を……、此妾故……、否、邪な戀だと、お諦め遊ばして、せめてもの御詫と、まあ恐れ入るでは御座いませんか、お美しいお心になり、斯う

してお世話下さいますお心を、お察し……申しますると、お惨しうて……、貴郎、御願で御座います。御両親様も御座いまして、勝手な御結婚は出来まいが、出来ますことなら、お嬢様と……」

「莫迦な事を云うては成りません。辰子様は、伯爵……華族様の令嬢ぢや無いな、僕は一介の貧書生だ。それに、お前と云ふ大事な妻がある。」

「否々、もう妾は、什麼御親切な御言葉を戴いても、死、死より無い……あッ、あッ、あッ、あゝ胸が……痛み出して、貴郎、く、苦、苦しいッ、」

「確りしておくれ、繁子……」

胸を押へて、咽喉の邊を搔くやうに、悶えた繁子は、落膽した態になり、幸彦の腕へ身を投げかけてしまふ。扉を開けて、濡れた眼をしばだゝいた、伯爵山村俊夫が現れて、馳せ寄らうとする令嬢辰子を制し、

「あゝ、お氣の毒だ。幸彦様とか、奥様を安心させておあげなさい、私は、此娘辰

子を、是非貴方に貰つて下さるよう、お願ひする、」

「えッ、けれど、僕には、繁子と云ふ、病人では居りますが、妻が在ります。それに、お言葉は有りが度ですが、華族の令嬢は嫌です。権門に……」

「あゝ、若し、私は、華族か知らんが、辰子は唯だ家に生れただけで、華族ぢや有りませんぞ。誤解なされるな、且つてす、奥様の、産れ替つた女として、側へ置いて下ださい、ねえ、奥様……」

「は……はい、貴郎、お嬢様のお體へは、妾の魂が入つて居ます……からね、何卒……あつ、あゝ、もう……貴郎ッ、咽……咽喉が……、手を……手を……、お嬢様……、お手を……、何卒、あゝつ、幾久しくねえ……、妾、嬉し……」

「繁子ッ、」

「奥様ッ、」

幸彦と辰子との手を握らせて、耐へた病苦の身を、俄然と其上に投げ乗せ、嬉し

さうに莞爾して、微笑んだまゝ、遠く繁子の靈魂は、呼び、叫べど、もう二度と戻らなかつた。わつと、辰子は、寢臺に倒れて、泣き咽鳴べば、幸彦は、繁子の體を抱いて、噛み締めた唇の綻るびて、むいと、悶えて、男泣きに哭た。

「貴郎……」

「辰子さん、」

期せず斯う呼び合つた二人は、再度び泣き噎んだ。

周圍に居る男女等も、耐らない悲哀の苦に、誰人一人として、眼を泣き脹さないものは無い、別して、清子は、身も世も無く、體を慄はせてよと泣き沈んだ。

大井子爵は知らず、三原の行衛も明瞭らねど、颯つと木の葉を散らした秋風は、此神祕を語り弔らうて、白布を敷つめた、舞臺の上の美しい靈肉を撫てて、遠く、餘韻永くひく、無量壽の晚鐘の音に消えて、西へくと吹いて去く。

—「こぼれ萩終」—

大正五年十一月十二日印刷  
大正五年十一月十五日發行

(定價金五十錢)

(郵税金六錢)

不許複製  
小説  
(萩れぼこ)

著者 森野 翠 泉  
發行者 東京市淺草區瓦町二十四番地 中村 惣次郎  
印刷者 東京市神田區宮本町五番地 高橋 治一

發行所

東京市淺草區瓦町二十四番地 中村 日吉堂

電話下谷四九三一番  
編輯東京二六一六番

家 庭 悲 劇 小 說

■ 戀 ざ ん げ

定價金五十錢 郵税金六錢

■ み を つ く し

定價金五十錢 郵税金六錢

■ 仇 な さ け

定價金五十錢 郵税金六錢

■ 歌 ま く ら

定價金五十錢 郵税金六錢

■ あ で 姿

定價金五十錢 郵税金六錢

■ つ が ひ ば な れ

定價金五十錢 郵税金六錢

■ 戀 と つ み

定價金五十錢 郵税金六錢

■ 因 果 ど う し

定價金五十錢 郵税金六錢

■ こ ぼ れ 萩

定價金五十錢 郵税金六錢

■ み だ れ 菊

定價金五十錢 郵税金六錢

848  
207





終

